



TITLE:

# 仏典の中の樹木：その性質と意義 (2)

AUTHOR(S):

満久, 崇麿

---

CITATION:

満久, 崇麿. 仏典の中の樹木：その性質と意義(2). 木材研究資料 1973, 7: 18-63

ISSUE DATE:

1973-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/51284>

RIGHT:

## 総説 (REVIEW)

# 仏典の中の樹木

## —その性質と意義— (2)

満久 崇磨\*

Trees in the Sūtra (2)

Takamaro MAKU

### 1 緒言

本文は第1報(木材研究資料6, 1972)に引続き、国訳一切経中の法華部、華嚴部、および阿含部にあらわれる樹木とあらたに本縁部、般若部、寶積部、涅槃部、大集部および經集部について調査した樹木を取りまとめたものである。

樹木の配列順は大体第1報に準ずるが、今回はある程度、用材樹、果樹、香花香木などのグループにまとめた。

写真は第1報の各植物園や試験場、温室などで撮影したもの外、新宿御苑、武田薬品工業株式会社京都試験農園にもお世話になった。また伊豆薬用植物栽培試験場の宮崎場長には特に御配慮をいただいた。これらの方々には深い感謝の意を表する次第である。

### 2 総論

「縁なき衆生は度し難し」という諺がある。本来仏教に由来するものであろうが、このような衆生のことを一闡提という。

大般涅槃經一卷9, 如来性品第4の6に

「サーラ、ニカラは枝葉を断ずるも、続生することとの如し。ターラの生ぜざる如くならず。衆生もこの縁を聞くことをえば五無間(地獄)といえどもなおよく菩提の因縁を生ず。一闡提はしからず。この妙典を聴受することをうるとも菩提の道因を生ずることあたわず」

また、卷33, 迦葉菩薩品第12の11に

「衆生はことごとく仏性あり。この仏性は無にして無に非ず。無常なりといえども常住にして変ずることなし。しかるに一闡提は業あるもすべてこれ邪業なり。因果を求めざる故なり。ハリタキの根茎枝葉花実のことごとく苦きが如し」

これらはターラ *Borassus flabellifer* の頭をきれば再生せず(第1報参照), ハリタキ *Terminalia chebula* にはタンニン成分の多いことを引用したものである。

同じく卷10, 一切大衆諸問品第5に

「マンゴーの果実をたべ、その核を破ってから、これを大地にまき一心に育てても芽は出ない。これと同様に一闡提はすでに善根を燃焼しつつしている。いかに改悔してももはや罪を除くことはできない」

一闡提に対して屍尸という言葉がある。この言葉はあまり広くは使われていないようであるが、たとえ破戒悪行があっても、外見は折目正しく善智識の如く見え、多くの衆生がこれによって善根をうるような比丘

\* 木質材料学研究部門 (Division of Composite Wood)

のことである。

大乘大集地藏十輪經一卷3，無依行品第3の1に

「商人，無数の衆生を殺してその目をえぐり，マダナ果と和合して目の宝薬となす。

諸の衆生の目無く，または盲なるもの，この宝薬を目中に塗らんに明浄の目をえん。破戒の比丘もまた然り。律において屍尸となすも，しかも出家の威儀形相を有し，よく無量の衆生のしばらくも見ることをえたるものをして清浄の智慧の法眼をえせしむ」

とあり，破戒の者もなお清浄で，一闍提にまさることを教えている。つまり一闍提は度し難く，もはやすくいはいないが，屍尸にはまだすくいがあるという訳である。

ニカラ *Desmodium gangeticum* DC. (タマツナギ?)

ハリタキ *Terminalia chebula* Retz. (ミロバラン)

マダナ *Datura stramonium* L. (シロバナヨウシュチョウセンアサガホ)

大方等大集經の中で仏陀が欲界と色界との中間にある大宝坊にあって，菩薩や如来について説く物語りは極めて幻想的であるが，ここでも樹木が引用されている。すなわち，菩薩の利他の行たる八方便（方便：他人を導くこと，その根本に慈悲がある）の1つである諸陰の方便（五陰：個人を構成する要素で，色〔身体〕，受〔感覚〕，想〔表象〕，行〔一般的精神作用〕，識〔行を統括する心の作用―判断〕）について

「陰は沫の如く，泡の如く，熱の如く，焰の如く，芭蕉樹の如く，幻の如く，夢の如く……，我に非ず，命に非ず，衆生に非ず，人に非ず，……。かくの如くに知る。これを菩薩の陰を觀ずる方便という」（卷28，無尽意菩薩品）。

芭蕉（キャダリー）は普通

バナナ *Musa sapientum* L. (Kadali) をさし，仏典ではもろくて柔かなことの比喩に，またインド古典文学ではその冷たい柔かさが女体の比喩によく用いられる。上文の真意は一文不知ともゆうべき筆者にはよく理解できないが，単純化すれば，芭蕉は葉が相重なってできであり，むけどもむけども以外何物も存ぜぬ（空）性質を引用したものであろう。

仏陀はまた，菩薩摩訶薩は衆生を教化するために如意神通であらねばならぬとしている。

「衆生ありて已身には大勢力ありと憍慢を起こさんに，菩薩はかくの如き衆生を調伏せんがために大力を示現せんとし，スメール山（仏教的世界の中央にある山，高さ16万8千ヨージアナ）を3指をもってあげ，他方無量の世界に投置すること，たとえば阿摩勤果を投げうつ如し」（卷30，無尽意菩薩品）。

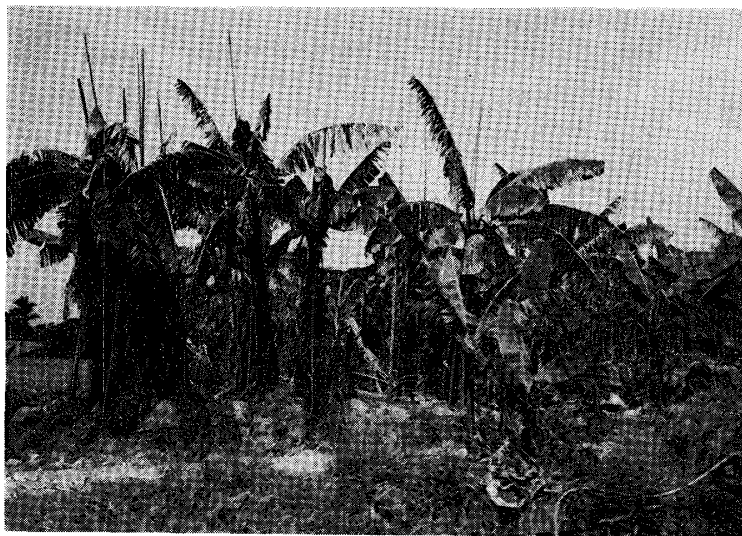


写真1 *Musa* sp. バナナ（台湾，草屯附近のバナナ畑）

また、大般涅槃経では

「カヅラ、パラージャ、ニグローダ、ウドンバーラの和合を林となし、これを離れて外に林なし。……四姓の和合を名づけて大衆となし、これを離れて外に更に別の衆なきが如し。衆生の我もまた是の如く五陰を離れて外に別我なきなり。如来の常住を則ち我となし、如来の法身は廣大不滅にして、8自在（自在は解脱の姿をさし、如来の大我には8自在がある）をうる。これを（真）我となす」（巻32, 獅子吼菩薩品）。

阿摩勤樹 *Phyllanthus Emblica* L. (アンマロク)

カヅラ *Acacia Catechu* Willd. (アセンヤクノキ)

パラージャ *Butea frondosa* Roxb. (ハナモツヤクノキ)

解脱もまた多くの樹木で説明されている。

「解脱は如来なり。如来は清浄にして汚穢あることなし。分陀利華の本性清浄なるごとし。……解脱は無動なり。婆師迦の如し。……解脱は堅実なり。佉陀羅（カヅラ）、栴檀、沈水のその性堅実なる如し。解脱は不可取なり。阿摩勤果の如きは人取持すれども解脱は取持すべからず。すなわち、不可取持なり」（大般涅槃経一巻5, 如来性品第4の2）。

分陀利華 *Nymphaea lotus* L. (スイレン, 白花)

婆師迦 *Jasminum Sambac* Ait. (マツリカ)

「戒を犯せば解脱を害す。解脱なければ涅槃を害す。あたかも樹の如し。もし根を害せばすなわち茎幹、心節、枝葉、華実皆成るをえず。戒を持すれば解脱を習う。根を害せざれば茎幹、心節、枝葉、華実皆成る」（中阿含経一巻10, 習相應品第5, 戒経）。

識は本来認識あるいは心の作用を意味するが、仏教では広くいろいろ複雑な意味をもち、その真意は筆者などには到底理解できそうにもないが、大宝積経一巻109, 賢護長者会第39や大乘顕識経ではニグローダ、ウドンバーラ、アームラ、アーマラカ、コービダーラ、チャンパカあるいはナツメヤシ、ザクロなどが識の解説に登場する。たとえば

「ニグローダ、ウドンバーラの種子は小さいが、やがて（形を変えて）大樹を生じ、大樹はまた種子を生ずる。すなわち種子はその形をすてて、また他の場所に生ずる如く、識も微細にして一定の形なく、種々の形を作り、またすてて、別の形をなす」。

アーマラカ *Phyllanthus Emblica* L. (アンマロク)

コービダーラ *Bauhinia variegata* L. (フイリソシンカ)

### 3 各 論

- 1) デイコ *Erythrina indica* L. Mandārava, pārijāta, (パ) pāricchatta(ka), 曼陀羅樹, 波利質多羅樹。

第1報の総論でのべた five celestial trees (flowers) の代表樹として、高さ100 ヨーヅナの巨大なマンドラーヴァの木がスメール山上にあり、その樹下では33天（天の神霊——霊的存在の衆生）が遊び（法華経, 法師功德品, 長阿含経, 初利天品, その他）、極楽世界をはじめ、ガンダス河の砂の数ほどもある仏国土を飾る莊嚴樹でもある。またその花、曼陀羅華は菩薩や如来の瞑想や悟りを祝う慶祝花として、マンジュシャカや栴檀、沈水などの抹香とともに天からふりそそぐ。おそらく仏典に最もよく現われる花樹の1つであろう。したがって、花には悦意華、天妙華、適意華など、木には円生樹、屋度樹などいろいろの仏典漢訳名がつけられている。

教義上の比喩としては、たとえば華嚴経一入法界品第39に

「菩薩の菩提心は波利質多羅樹の如し。波利質多羅樹の樹皮の香気は婆師迦、瞻蔔、蘇摩那の花のあらゆる香気も及ぶあたわず。菩薩の菩提心もかくの如し。波利質多羅樹のまだ華を開かずといえども、正に知る

べし。これ無量の諸花の出生の所なるべし。菩薩の菩提心もかくの如し。まだ智の花を開発せずといえども、これ無数の天人衆の菩提の華の出生の所なり」。

もちろん樹皮の香気という表現は celestial tree としての形容で、実際には香気はない。

また中阿含経一卷1，七法品第1，昼度樹経第2や大般涅槃経一卷28，獅子吼菩薩品第11の3には次のような意味の波利質多羅樹の教がある。

「天のパーリーチャッタの葉がしおれて黄色になると、33天の衆たちはその葉が間もなく落ちるであろうと歓喜する。葉がすでに落ちると、今度は間もなく新葉が出る（還生）であろうと喜び、新葉が出れば間もなく蕾が出る（生網）であろうと喜び、蕾が出れば間もなく鳥の喙のように（如鳥喙）ふくらむと喜び、生如鳥喙になると間もなく鉢の如く開く（生如鉢）と喜び、生如鉢になると間もなく満開（開敷）近しと喜びかくして開敷すれば、光の照す所、色の映ずる所、香の薫ずる所 100 ヨーjanaに及ぶ。これは丁度、仏弟子が出家することを思い（葉黄）、僧形となり修行し（葉落）、思念をこらし欲悪をはなれた初禪をえ（還生）、さらに第2禪（生網）、第3禪（生如鳥喙）、第4禪（生如鉢）をえて、ついに真如（尽開敷）をえ、もろもろの煩惱を解脱して阿羅漢となる段階に似る」

「陳葉（古葉）すでに落ち枝条滋潤（うるおう）せば、衆人“新葉果華まさに出づること久しからざるべし”と歓喜す。菩薩もまたかくの如し。この甚深般若波羅蜜多経をきくことをえて信解すれば（落葉の如く煩惱を脱して）久しからずして菩提をえん」（大般若波羅蜜多経一卷300，初分難聞功德品第39，卷363，初分実説品第62，卷559，第5分不思議品第10の1）。

また

「葉のおちたパーリーチャッタの木のように、在家としてのいろいろのしるしを除き去って、出家して犀\*の角のように独りで歩め」（Sutta-nipāta：中村元訳，ブツダの言葉，岩波文庫）。

中阿含経一遊行経第2には例外的にマンダーラヴァの花を弔華として用いている。

釈迦の弟子マハーカッサパ（摩訶迦葉）がまだ師の入滅をしらず、500人の比丘と共にクシナガラに急ぐ途中、1人のジャイナ教徒が手にマンダーラヴァの花をもっているのに出会う。

「君はどこから来たのか」「クシナガラから来た」「私の師を知っているか」「知っている」「師は健在か」「入滅してから7日、私はクシナガラでこの天華をえたのだ」。



写真2 *Erythrina indica* L. デイコ（古曽部温室）

\*独覚一ひとりで悟りをひらくこと一をよき犀に比する

デイコは樹高15~18mに達する落葉の喬木で、葉は広卵形の3出複葉、樹幹にはかたい棘がある。初夏に真紅色から紫紅色の花が、長さ約30cmの総状花序につき、非常にあざやかである。インド、ビルマ、ジャワ、南ポリネシア諸島に広く分布し、日本でも南部の温暖の地には露地に生育する。デイコは沖縄県の、また同属のカイコウズ（アメリカデイコ）は鹿児島県の県花、県木として賞用されており、庭樹、街路樹にもよく用いられる。材は白色軟質で気乾比重0.35、箱材料などにすることもがあるが、一般にはあまり利用しない。

婆 師 迦 *Jasminum Sambac* Ait. (マツリカ)

蘇 摩 那 *Jasminum officinale* L. (ソケイ)

何れも花に芳香あり、有名な香水の原料である。

## 2) ウドンゲノキ *Ficus glomerata* Roxb. Udumbala, 優曇鉢羅樹

ウドンゲの華という言葉は仏教を介して、日本人には随分親しまれているが、さてそのイメージをえがこうとしても、華はもちろん、葉についても、木についても出てこないのが現実である。ニグローダ、インドボダイジュ、プラクシャと共にイチヂク属の木で樹幹直径3m以上にも達する常緑の大喬木となり、枝が多い。葉は卵形、長楕円形。第1報の総論で説明したように果実は幹生で、丁度ブドウの房が太い幹にぶらさがるような形でつく。直径約3cmの梨形紅色で、甘味があり食用となる。イチヂク属の特長として花は壺状の花托にかくれて外から見えないが、仏教では3000年に一度花が咲くとされ、非常に珍しいことの比喩に用いられている。それとともに釈迦入滅の後、3000年を週期としてこの世は乱れ、五濁の悪世となり、再びウドンゲの華ひらく時、仏陀や転輪聖王がこの世に出現して世直しをするという思想や、このままではす



写真3 *Ficus glomerata* Roxb. ウドンゲノキ

(President, Forest Research Institute, Dehra Dun, および Dr. D. Narayanamurti の御好意による)

まぬ、何かが起こるのではないかという末世思想が一部に生れてきた。今や釈迦入滅後2500年、それこそガンジス河の砂の中からのわずかひと握りほどの知識をえただけで思いあがり、自然界に汚濁をまき散らし、その調和を乱してとどまる所を知らなかった人類が、今自然界から思いもかけぬ手痛い打手替をうけて、その代償がいかに高価なものであるかを思い知らされた。確かに「何かが起こった」のである。これが読めなかった所に、人間の智慧の浅さがおしはかられる。あと残された500年間、人類がその英智？によってよくこの火宅から脱出しうるかどうか。

さてウドンゲノキはインドのヒマラヤ山麓，インド西北部，中南部からセイロン，ビルマに多く，神聖樹であり，よき緑陰樹でもある。

ビルマではタパン (thapan)，またはニャウン (nyaung) とよび，材質は軟かく，気乾比重0.48位で灰色を呈する。家具，農具，一般建築，梱包用材として用いられる。

仏典にあらわれるウドンバーラは，もっぱら，その花のえ難く，会い難いこと，丁度菩薩や如来のこの世への出現のようであるという比喩に用いられている。その一節を紹介すると

生彼仏国諸菩薩等，……猶如蓮華，於諸世間，無汚染故。……如尼拘類樹，普覆一切故。如優曇鉢羅，希有難遇故。（仏説無量寿経巻下）。

（仏国土に生れたもろもろの菩薩は，……一切の世間に汚されないこと蓮華の如く，……一切の衆生を保護することニグローダの如く，……あい難いことウドンバーラの華のようである）。

この外，第1報の総論でのべたようにパンの実と共に人間の平等をとく比喩としても用いられ，過去六仏の第五仏拘那含仏の菩提樹でもある。

中阿含経一優曇婆羅経第8では学林としてのウドンバーラ林が王舎城外にでてくる。

### 3) フイリソシンカ *Bauhinia variegata* L. Kovidāra, 拘鞞陀羅樹

Celestial trees の1つで，マンダーラヴァと共にスメール 山上にこの大木があるとされているが，仏典ではこの木の花を香花として扱っている場合が多い。

「この経を信ずる人は，天の華パーリジャータ，コービダーラ，マンダーラヴァ，マンジュシャカの香をかぎわけることができる」（法華経一法師功德品）。

また Sutta-nipāta (前出) には

「葉の落ちたコービダーラの木のように在家としてのしるしを棄て，束縛をたちきって，勇者は唯一人歩め」

という意味の詩句がある。前述したようにパーリーチャッタの木についても同じような詩句がある。樹木学的には落葉樹のパーリーチャッタがナチュラルであるが，常緑のコービダーラの葉をふるいおとすには，異常な大勇断を要するだけに，信仰上からはこの方が力強さがあらわれる。

さて，フイリソシンカは高さ6 m 位までの常緑の小喬木で，葉は写真4でわかるように特長的な深裂のあるハート形または腎臓形である。早春葉にさきがけて，紫に紅色または黄色の斑点いりの5弁の美しい花



写真4 *Bauhinia variegata* L. フイリソシンカ  
(Delhi, Buddha Jayanti Memorial Park)

が、腋生の短い総状花序に数個つく。芳香があり、蕾を食用にすることもある。

ヒマラヤ西部からビルマ、中国まで分布し、マラヤやシンガポールでは街路樹に利用されている。材の利用価値はあまりない。

4) ムチャリンダ *Barringtonia actangula* Gaertn.? Mucalinda, 目真隣陀樹

The Vinaya-Pitaka によれば、釈迦が悟りをひらいた後、第3週目にこの樹下におもむき1週間瞑想している。樹木名についてはあいまいな点が多いが、次の3樹種が有力である。

*Barringtonia actangula* Gaertn.

*Pterospermum acerifolium* Willd. (モミジバウラジロ)

*Pterospermum suberifolium* Lam.

しかし、*P. acerifolium* は梵語で karnikāra とされていることが多いことや *P. suberifolium* が樹形、性質が *P. acerifolium* に似ていることなどから、結局ムチャリンダを *B. actangula* と考えるのが妥当なように思われる。

この木は樹高10~15mに達する常緑の中喬木で、葉は写真5でみるように長楕円状契形をして、一般に枝



写真5 *Barringtonia actangula* Gaertn.  
(W. Pakistan, Lahore, Laureth Garden)

頂部に群生する。

花は白または帯赤白色で、下垂する総（穂）状花序につく。インド全域、セイロン、シンガポールまで分布しているが、とくにインドベンガル州に多い。

材は黄褐色で、諸器具用、薪などに利用する程度である。

ビルマではキイ (kyi) またはチックナム (chicknam)、サバではプタット (putat) とよび、枝低く幹が短い。材は白色で軟質、気乾比重 0.54~0.7 であるが、木理が均一で光沢があり、板物、造作用、とくに木理のよいものはキャビネットに使うこともある。

5) ロネホ *Buchanania Latifolia* Roxb. Rājādana, piyāla

The Vinaya-Pitaka によると釈迦はムチャリンダのつぎ、つまり解脱後第4週目にこの木の下で瞑想する。この木の学名についても

*Mimusops Kauki* Linn. (サワノキ)

*Butea frondosa* Roxb. (ハナモツヤクノキ)

など諸説があるが、*B. Latifolia* が最も有力である。樹高約 15 m、樹幹直径約 30 cm に達する半落葉喬



木で、葉は広楕円形無柄、淡緑色の花が長さ約 25 cm の円錐花序につく。

インド中央部と西部からビルマにかけて分布している。

インドではピヤール (piyal) またはチロリ (chiroli)、ビルマではルンボ (lunbo) と呼ぶ。材は灰色から褐色を呈し、インド産は気乾比重0.46位で家具、寝台用材、ビルマ産は0.53で一般建築、家具用材となるが、用材としては重要な樹種ではない。

#### 6) 七葉樹 *Alstonia scholaris* Br. Saptapattra (ジタノキ)

釈迦と関係の深いマガタ国の主都ラージャグリハ (王舎城) は周囲を 5 山にかこまれ、東北のグリドラクータ山 (耆闍崛山) が有名であり、南にヴェバーラ山 (毘婆羅山) がある。このヴェバーラ山の七葉樹林の中に石窟があり、釈迦はよくここに滞在した。

雑阿含経—安眠経、瞿化加経には石窟内の釈迦の瞑想、安眠を邪げようとして、悪魔がたびたび現われることが記載されているが、この石窟 (あるいはこの種の石窟の 1 つ) の直前に七葉樹の巨木があったのでこれを七葉樹窟と呼び、釈迦入滅の後、マハーカッサパ、アーナンダらが議長となって、ここで第 1 回の集会を開き (長阿含経—散陀那経第 4)、釈迦の教えを編集して最初の経と律が作られたと伝えられている。

梵語 Saptapattra は七葉という意味であり、中国語の七葉樹は普通トチノキ属 *Aesculus* にあてられているから、この点から

インドトチノキ *Aesculus indica* Hiern.

も考えられるが、仏典の内容からはきめ手がない。ここでは諸文献から一応 *A. scholaris* としておく。

七葉樹はインドのヒマラヤ西部、アッサム地区およびセイロン、ビルマ、タイ、マラヤ、フィリピン、インドネシアおよびオーストラリアまで広く分布している。樹高約 20m、樹幹直径 1.0m に達する常緑喬木で写真 6 のように広披針状へら形の葉が輪生する。



写真 6 *Alstonia scholaris* Br. 七葉樹  
(W. Pakistan, Lahore, Laureth Garden)

東南アジア地区の *Alstonia* spp. にはかなり沢山の種類があり、比重も 0.4~0.7 の広い範囲にわたっているが、*A. scholaris* は低比重の種類に属し、インドではチャティアン (chatian)、ビルマではレットク (lettok) とよび、材は白色で軽軟な割に緻密、気乾比重 0.4~0.5 で、一般家具、箱物家具のパネル芯材、とくにマッチの軸木として利用が大きい。フィリピンではジタ (dita) と呼び、これがそのまま日本語化している。タイではティンペット (tinpett) といいかかなり蓄積が多い。材は淡黄褐色で、家具、箱類の外、天井板や荷造り用材にも使う。ニューギニアでは white cheese wood、インドネシア、サラワクでは pulai と

よび、コンクリート桹板として利用しているようである。

*Alstonia* Spp. は東南アジア地域では、国や地区によってよく pulai ○○, pulai ×× とよばれ

Jeltong *Dyera costulata* Hk. f.

Jongkong *Dactylocladus stenostachys* Oliv.

と共に現在相当量が日本に輸入され、*Alstonia* と *Dyera* は婚礼家具の主役である和タンス、洋タンスなどのパネル芯材や婦人靴のヒール用材として、また *Dactylocladus* は後出の

Bintangur *Calophyllum* spp.

と共にベットその他の家具構造材としてなくてはならぬ材である。Bintangur もまた仏教に関係が深い。

こうしてみると、一見仏教には無縁のように見える現代っ娘の周辺にも仏教二千数百年の縁起の存在を感じずる。

#### 7) キャダンバ *Anthocephalus cadamba* Miq. Kadamba, 迦曇波樹

大莊嚴(経)論一卷9の第54によると、ある時魔王が尊者ウパグタを悩まそうとして、かえって尊者の神通力によって束縛され

「身毛皆さかだち迦曇波華の種々に触悩を起すが如し」

と述懐する。

これはキャダンバの花が丁度栗のいがに似た形をしていることを引用したものであるが、インド古典文学

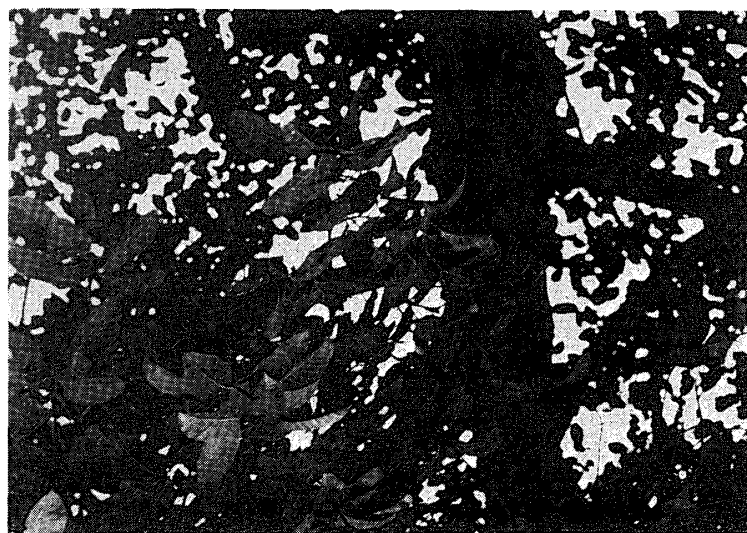


写真7 *Anthocephalus cadamba* Miq. キャダンバ  
(Delhi, Duddha Jayanti, Memorial Park)

にあらわれるキャダンバの花の香は恋情をかきたて、恋の仲介者である。

キャダンバは世界の珍種ともいわれ、葉は楕円形、長楕円形または卵形、花は黄白色の叢生卵形で一見いがのような形をしている。和名クビナガタマバナはこれから出たものであろう。とくに夜間に芳香を放つ。果実は肉質の球形集果で食用となる。古酒 Kadambari はこの果実から作られたと伝えられている。樹皮は薬用。

ヒマラヤからセイロン、マラッカに自生または栽培されているが、ビルマ、タイ、スマトラ、ボルネオにも分布している。

インドではキャダン(kadam)といい、アッサム、ベンガル州にとくに多い。材は黄白色または淡黄褐色で、気乾比重0.42~0.55、軽構造材、天井板、合板に使われる外、一般板材、荷造用材、あるいはパルプ原料としてインドでは重要樹種である。ビルマでもキャダンまたはマウレットンシ(mau-lettan-she)とよび

マッチの軸木、パルプ用材として安定した用途があるが、一般建築、箱物材料にも使用される。マラヤではケレンパヤン (kelempayan), カリマントンでは克蘭ペヤン (klampeyan), 北ボルネオ, サバではララン (laran), サラワク, ブルネイではセリンポ (selimpoh) とよび主に茶箱, マッチの細木, パルプ原料とに用いられている。

8) インドチャンチンノキ *Cedrela Toona* Roxb. Kacchapa

第1報の5大樹の教えに出るカッチャパは樹高20m以上, 樹幹直径 80 cm 以上に達する常緑の大樹である。葉は披針状小葉からなる羽状複葉で, 蜜のような芳香をもつ白色の花が咲く。ヒマラヤ山麓, インド中, 南部およびビルマ原産で, ジャワ, オーストラリアに分布している。

インドでは一般に Toon とよぶ。材は切削直後は cedar 類に似た香気があり, 心材は淡い煉瓦色であるが空気にさらされると次第に暗色をおびてくる。板目の木理が mahogany に似ているので Indian mahogany とよび, 選材すれば突板や高級家具材となる。気乾比重0.48~0.59で柔かい触感がある。昔は独木船によく用いられたが, 現在は室内造作, 建具, 彫刻その他工業用材として利用されている。また湿気に敏感なので茶箱用材として珍重される。東南アジアでも toon が通り名であるが, ビルマではシトカド (thitkado) といい第1級の家具, 葉巻箱用材である。タイではヨムホム (yom-hom), ビルマではイエダマ (yedama) という。ニューギニアでは New Guinea red cedar と呼び, 樹高 40 m, 樹幹直径 1.5 m の巨木となる。

気乾比重0.74位でやや重く, 芳香がある。いずれも一般建築以外葉巻箱, 家具, 頑具用に使われている。写真8は同属のチャンチンノキ *Cedrela sinensis* A. Juss. で中国原産, 葉は toona によく似ているが, やや大きい。葉とくに新葉には特有の臭気があるが, 中国, 朝鮮では新芽を好んで食べる。

9) インドキワタ *Ceiba pentandra* Gaertn. Karpāsa, (パ) Kappāsa, 衣樹, 劫波育樹

「隴をえて蜀を望む」のは衆生の本性かもしれぬが, 釈迦はある時祇園精舎で弟子のアーナンダ達に人間



写真8 *Cedrela sinensis* A. J. チャンチンノキ  
(京大理学部植物園)

の欲の限度を知って命終るものの少ないことを説き次のような話をする。

「昔、インドに頂生という王がいた。勇猛有徳の明君ではあったが、一国だけで満足せずつぎつぎに隣国を征服した。たまたま王がウッタラクル国 (Uttarakuru\*) を攻めた時、はるか遠く地平線上に樹木が整然とはえそろっているのが見えた。王は家臣たちにいう“あれはカッパーサという木だ。ウッタラクル人はあれから衣を作り身につけている。お前達もそれにならったらよい”」。頂生王はその後際限なく領土を広め、ついには帝釈天の座をとり天界をも支配しようと考えた。しかし、この不遜な考えをいなくや否や王は忽ち重病にかかり命を終えたが、臨終にあたって彼は際限なく欲望をおこし、結局何事にも満足せず命を終えることを後悔して“決して他人事と思うな”と教えている。(増壹阿含經—安般品第17, 中阿含經—四州經第3)

ビャクダンの項で述べたように、釈迦は臨終の際アーナンダに

「私の遺体は転輪王と同様に香油で洗い、新しい劫波育樹衣で幾重にも包み、金棺におさめ胡麻油をそそぎ、さらに第2の鉄棺でおおつた後、栴檀作りの棺におさめ、香木を積んで茶毗にふせよ」(長阿含經—遊行經第1, 增壹阿含經—非常品第51)

と命じている。

巴英辞典によると Kappāsa は silk cotton tree とされている。俗に silk cotton と呼ぶ樹木は数種あるが、インドキワタが代表的である。しかし、Kappāsa に対応する梵語 Karpāsa はインドワタ *Gossypium herbaceum* L. である。インドキワタの繊維は俗にカボックと呼ばれ、枕、フトン、椅子あるいは救命具などの詰物として古くから用いられているが、糸に紡ぐことができないといわれているから、これだけでは織物にはならない。綿織物は麻、絹あるいは毛織物などの中で最も新しい織物で、紀元前1800年から前800年の間にインドで初めて作られたと伝えられているから、釈迦在世当時すでに織物として存在していた訳で、その点からは劫波育樹衣はインドワタの綿毛で作られたものと考えるのが順当であるが、この辺

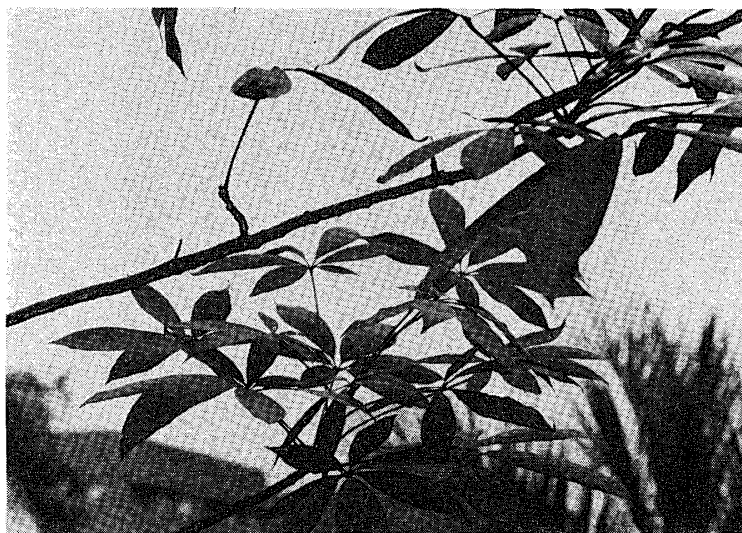


写真9 *Ceiba pentandra* Gaertn. インドキワタ  
(古曽部温室)

\* 仏教的世界観によれば、世界の中央にスメール山がそびえ、これをとりまいて九山八海があり、その最外周の東西南北に次の四国がある。

東	ヴィデーハ (Pubba-videha, 弗婆提)
西	ゴダーニヤ (Godāniya, 俱耶尼)
南	ジャンブドヴィパ (Jambū-dvipa, 閻浮提)
北	ウッタラクル (Uttarakuru, 鬱單日)

が少しあいまいである。

それはとにかく、インドキワタはいわゆる kapok tree で、樹高約 15 m、樹幹 1.0 m 以上になる落葉喬木で枝が水平にはり、樹冠の広いのが特長である。葉は写真 9 でみられるように特長のある長柄の掌状葉、蒴果の中に繊維に包まれた種子がある。この繊維がカポックで強くはないが、長くて光沢があり、耐久、耐水性にとむ。

熱帯地方に広く分布しているが、インドではベンガル地区に多く、通常 kapok、ベンガルでは schwetsemul とよび、材は淡い灰白色から灰褐色で、辺、心材の差があまり明瞭ではない。気乾比重 0.14～0.35 で非常に軽く、独木舟、カヌー、頑具、マッチ、箱類の材料となり、選材すれば balsa の代用としてパネル類のコア材料に適する。樹皮は生薬、ゴム材料の原料となる。また種子油は料理用や機械油、石鹼などの工業原料である。ビルマではシンボレットパン (thinbaw-letpan) と呼び、カポックとマッチ軸用として有用である。

#### 10) キワタ *Bombax malabaricum* DC. Śālmali

Sudhanakumāravadāna (奈良康明訳アヴァダーナ、仏典 I) でキンナラの王女マノーハラがスダナ王子の道中安全のため、いろいろの注意を仙人にことづける詩に

アーシーヴィシャーには多種多様の蛇

ヴェートラナディー河には鋭い棘のあるシャールマリー樹が生えている。

とうたっている。

シャールマリーは樹高 30 m、樹幹直径 1.0 m 以上に達する落葉喬木で、葉は写真 10 のようにインドキワ

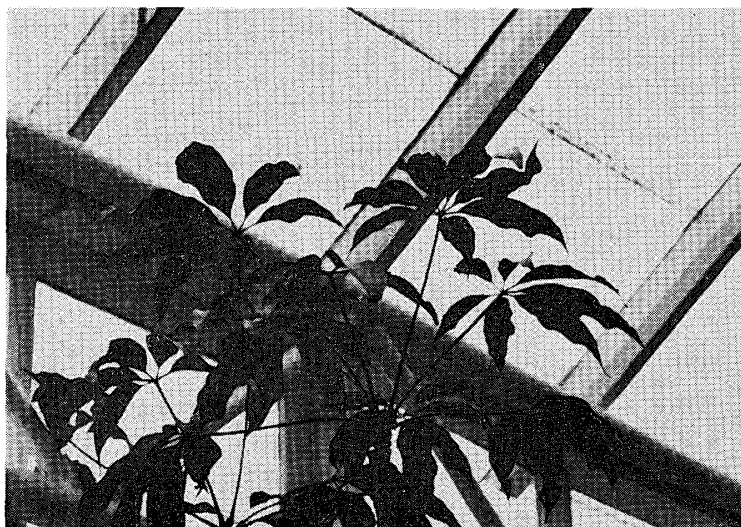


写真10 *Bombax malabaricum* DC. キワタ  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

タのそれと全く同じで、外側が黄白色、内側が橙紅色の 5 弁のきれいな花が咲く。蒴果は成熟すると 5 裂にひらき中から白色の種毛をだす。これがいわゆるパンヤで枕などの詰物に用いるが、インド、セイロン、スマトラ、ジャワ、ビルマなどに広く分布し、耐風力があるので防風林に作られ、並木、庭樹としても利用される。インドではセムール (semul) とよび、材ははじめクリーム色であるが、次第に黄褐色から灰褐色、時には淡紅色に変る。比重 0.2～0.5 の軽軟材で、腐朽、虫害、変色をうけやすい。マッチ軸木、マッチ箱用材として有名であるが、果物箱、天井板、軽家具類など広い範囲に利用される有用材で、合板にも適する。かつてプロペラボス用の compreg に利用されていたが、今後複合材料としての用途開発が期待できよう。

仏典に、柔かいこと、修行未熟で精神の動揺しやすいことの比喩に都羅綿 (Tūla) という言葉がよくでて



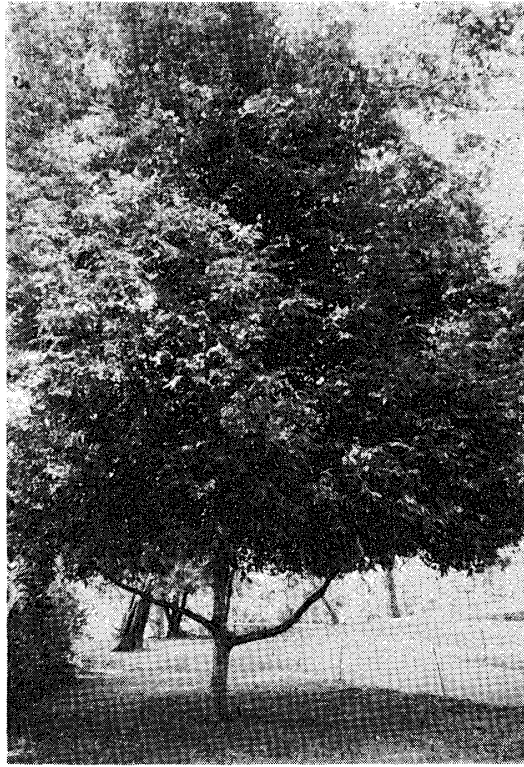


写真12 同 前  
(同 前)

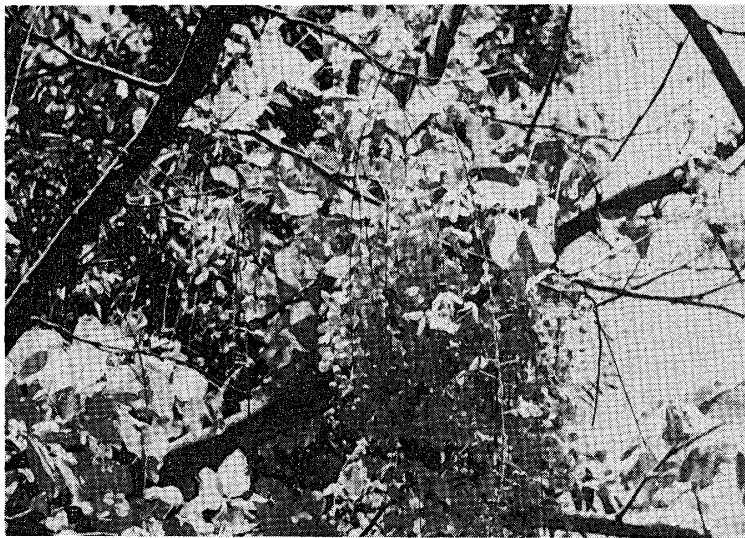


写真13 *Cassia fistula* L. ナンバンサイカチ  
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden)

春から夏にかけて、直径約 5 cm 淡黄色 5 弁の花が長さ 30~50 cm の腋生下垂の総状花序について咲きほこり、一名 Golden shower とよび一般になじみが深い。蒴果は長さ 1 m にも達し、果肉、種子は薬用（下剤）に用いられる。インド原産、セイロン、ビルマ、マラッカから中国、ハワイにも分布し庭樹、街路樹として愛用される。セイロンでは仏花として有名である。

インドではアマルタス (amaltas)、タイではクン (khun)、ビルマではヌグ (ngu) と呼び、心材は赤褐



色を呈し、気乾比重0.98位、耐久性があり車輻、車輪、農器具、工具の柄などに利用するが、広く交錯した parenchyma をもち、きれいな木理 (partridge mottling ウヅラ杳) を示すものはキャビネット、高級家具類に使われる。

13) コネッシ *Holarrhena antidysenterica* Wall. Kutaja, 貴吒迦樹

マハーナーマ長老が修行の苦しさから、ネーサーダヤ山で自殺しようとして、悟りをえた時の詩に

「クタジャ樹とサッラッキ樹の多いネーサーダヤ山から私の邪心は放逐された (Theragāthā: 早島 鏡正 訳 長老の詩 仏典 I)。

というのがある。また大莊嚴 (経) 論卷14に

「シリグッタ (バラモン教徒) の作れる屋舎、清浄鮮潔なることクタジャ樹の如し」

と述べている。シリグッタは奸計によって釈迦を殺害しようとしたが、釈迦の行う奇蹟によって仏門に帰依したことが大莊嚴 (経) 論に伝えられている。



写真14 *Holarrhena antidysenterica* Wall. コネッシ (中央)  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

クタジャはヒマラヤ地域、ビルマ、タイ、北部マラヤに分布する灌木性の低木で、樹皮や種子に有毒成分コネッシンを含む。ビルマではレトックギイ (lettok-gi) と呼び、気乾比重 0.64 で比較的柔かく、材は白色、木理均一である。大莊嚴 (経) 論はこの性質を引用したものである。彫刻、櫛、頑具、旋盤細工など多方面に使用されている。インドではクルチ (kurchi) と呼び、古くからシッソー (sissoo) と共に燃料として重要な位置を占めており、アーリア人の最初の居留地の1つである Hastinapura 遺跡には、当時これらの樹木が炭または薪として使用されていた痕跡がみられるという。

14) インドガキ *Diospyros Embryopteris* Pers. Timbaru, Tinduka, 鎮頭迦樹

「盛りをすぎた男が、ティンバル果のようにもり上った乳房をもった若い女をひきいれて、かの女への嫉妬から夜も寝られない。これは破滅への門である」 (Sutta-nipātā: 前出)。

これは釈迦が祇園精舎で、破滅についてのべた偈の一節であるが、いや全く年寄の冷水はいけません。

インドガキはその名の示す通りカキノキ科・属の木で、葉は長楕円披針状、写真15の白黒では実感がでないが、緑の葉の中からビワの実のような橙黄～橙紅色の小粒のかわいい実が沢山のぞいているさまは、乳房というよりも乳首というにふさわしい。乳房はむしろターラ (第1報、オーギヤシ) の方で、サンスクリット古典叙事詩ラーマヤナ (Rāmāyana) でコーサラ国の王子ラーマがターラの実を見るたびに、妻シータ





写真15 *Diospyros Embryopteris* Pers. インドガキ  
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden)



写真16 前 同  
(同 前)

一の盛り上った乳房を幻想している。

ヒマラヤ地区からセイロン、マラヤに分布し、インドではベンガル州に多い。

わが国で古くから唐木として有名な黒檀類はこの属で

本 黒 檀 *Diospyros eburnum* Koen.

縞 黒 檀 *D. philosanthera* Blco.

*D. rumphii* Bakh.

青 黒 檀 *D. choloxylon* Roxb.

*D. mollis* Griff.

などが有名である。また *D. marmorata* Park. は Zebra wood または Marble wood (インド) と呼ばれているが、日本で突板として有名な zebrawood はアフリカ産マメ科の *Microberlina brazzavillensis* である。

インドガキの材は灰色で緻密であるが、心材には、縞黒檀に似た黒色の縞が不規則に走り、地域によっては黒檀として通用しているようである。強度、耐久性に秀れ、高級家具、彫刻、床 (とこ)、小物入れなどに広く利用されている。インドでは黒檀と同じく ebony と呼んでいる。

15) ナガミパンノキ *Artocarpus integrifolius* Auth. Panasa, 波羅蜜樹

第1報総論でのべたように、マンゴーの実と共に人間の平等をとく場面に引用されている。仏典I (中村元訳, 仏伝に関する章句) や仏本行集経などによると、当時の道徳否定論者プーラナカッパは「果報について質問されると、丁度マンゴーの実について質問されたのにパンの実について説明し、パンの実について質



写真17 *Artocarpus integrifolius* Auth. ナガミパンノキ  
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden)

問されたのにマンゴーの実について説明するように、常に無作用の説をといた」そうである。どこかでもよく聞くような話ではある。

パンノキにはいろいろの種類があるが、インドから東南アジアにかけては、インド原産の *A. integrifolius* (ナガミパンノキ) が多い。野生種、栽培種ともに樹高 20 m, 樹幹直径 1.0 m あるいはそれ以上に達する常緑の喬木で、生長が早く10年で樹幹直径 0.5m に達した記録がある。葉は写真17にみるように長楕円形で、直径 30~60 cm, 長さ 45~60 cm の楕円形の果実が幹生して、熟すると黄褐色になる。

パンに似た味がして、蛋白質、ビタミン A, C に富むといわれる。焼いて食べるほか、砂糖漬にしたり、乾かして野菜代りにカレーなどにいれる。種子も食用になる (強壯剤)。

インドでは kathal, jackwood とよび、材の新しい切口はレモン色であるが、次第に暗色になり mahogany に似た色調になるので、本来は果樹であるが、家具構造材、一般木工、刷毛木地、ロクロ細工などにもよく用いる。

比重0.5~0.58, 古代ベンガルでは sal (*Shorea robusta*), teak (*Tectona grandis*), gamari (*Gmelia*



写真18 *Artocarpus incisa* L. マルミパンノキ  
(Ceylon, Colombo, Vihara Maha Devi Park)

*arborea*) と共に秀れた造船用材であった。ビルマでも jack と呼び、材から黄色染料をとり、僧侶の衣(ころも)を染める。一般家具、木工用材でもある。タイ、カンボジャではクノールプレイ (khonor-prey), マライではチェンペダック (chempedak) とよびやはり家具、寄木細工、ロクロ細工、彫刻などに用いられている。

***Artocarpus incisa* L.** (マルミパンノキ) は原産地について諸説があるが、南太平洋説が有力で、インドでも古くから栽培されている。樹高約20m、樹幹直径1 m以上に達するものもある。葉は写真18のように特長のある、大きな鋭尖羽状中裂形で、果実は球形または卵形である。生食もできるが普通石焼きにする。*A. integrifolius* より味がよい。ポリネシア諸島には種無し改良種が多く、主食として重要であり、家の周囲に早生種、晩生種を適宜植えておけば、半年ぐらいいは食べ続けることが出来るという貴重な果樹である。材は白蟻に強く、一般建築や独木舟に用いる。樹皮乳液はトリモチになり、樹皮の靱皮繊維からタパ (tapa) に似た布を作るなど、利用価値の高い樹種である。*Artocarpus* spp. は最近わが国にも輸入され、合板その他に利用されている。

#### 16) アンマロク *Phyllanthus Emblica* L. Āmalaka, 阿摩勒樹

仏典に最もよく現われる果樹の1つである。樹高約10 mの落葉喬木で、写真19のように、線状長楕円形鈍頭の葉が枝に2列に並び、一寸モミ (*Abies* spp.) の枝に似ている。果実は直径1~2 cm、肉質の扁球形で成熟すると紅色になる。酸味があり生食できるが、砂糖漬や塩漬にもする。マラヤ原産といわれ、インド全域、セイロン、マレーシア、中国に分布する。ビルマではジビュ (zibyu) とよび、気乾比重0.83位で、赤色を呈し、木理密で堅く耐久性にとみ家具、農器具材に適する。

「アンマロク (āmalaka) —漢訳仏典ではマンゴー (amalaka) となっているが、サンスクリット語の方をとる—またはパンの実を食べたいと思う時、まずその種子を良地に植え、よく世話をすれば漸次生長して花果ができ、ついに果実が熟する。丁度そのように菩薩が菩提をえようとするならば、まず六種の波羅蜜多を学び、また衆生に対しては四摂法 (菩薩が衆生救済の時にとる四種の基本的な態度—布施、愛語、利行、同事) により般若波羅蜜多に安住せしめ、安住し終らば一切の生老病死の解脱をえん」(大般若波羅蜜多經一卷356, 初分多聞不二品第61の61, 大藏藏 (經) 論卷15)。

仏典ではよく一目瞭然たることを“掌中の阿摩勒果をみる如し”という。

「如来の天眼は最も清浄、一切の世界の一切の有情 (衆生) の色相 (すがた) の差別および余のものの種々

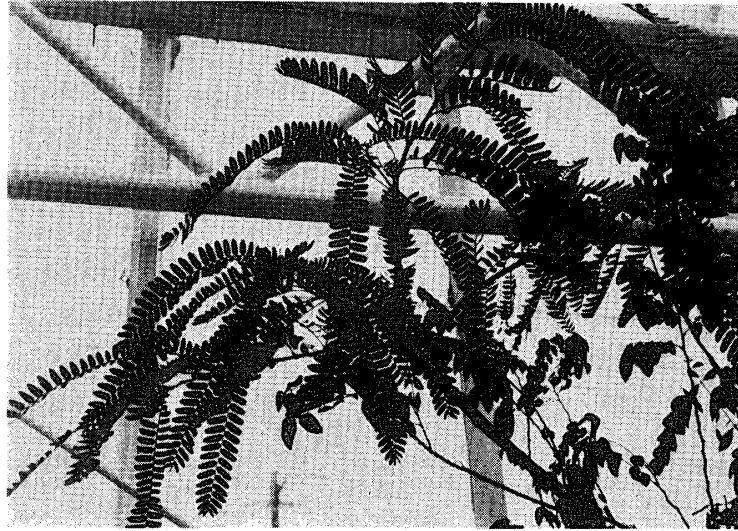


写真19 *Phyllanthus emblica* L. アンマロク  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

の不同をみること(その本質をみてことごとく分別すること), 掌中の阿摩勤果を観るごとく, 諸の人天の眼の及ばざる所なり」(大般若波羅蜜多經卷568, 方廣大莊嚴經卷10, 出曜經卷14など)。

「見(見解一よく考慮推求して事を決すること)に2種あり。1は相貌見, 2には了了見なり。了了見は眼の色を見るが如し。人の眼根の清浄にして壊せず, 自から掌中の阿摩勤果の如し。菩薩摩訶薩の明かに, 道, 菩提, 涅槃を見るもまた是の如し」(大般涅槃經一卷17, 梵行品第8の3)。

しかし, 同じ意味の表現が, 菴羅果(マンゴー, Āmra)によってもなされている。

「如來は眞實を顕し給うこと掌中の菴羅果の如し」(大空積經卷70)。

「如來は無上智を獲得す。この故によく業の因果を知る。……如來の知見は障礙なく掌中の菴羅果をみる如し」(大方等大集經卷3)。

しいて考えれば, 当時両者共に用いられていたととれない事はないが, 常識的には何れか一方であろう。こうした混乱は発音のよく似た言葉にいろいろの音訳語があらわれている場合に, よく起りうる。アンマロク, マンゴーなどがその好例で, 参考のためにその類似語をひろってみると

マンゴー *Mangifera indica*, Āmra 菴羅, 菴摩羅, 菴沒羅

アンマロク *Phyllanthus Emblica*, Āmala(ka) 阿摩勤, 菴摩勤, 阿摩洛, 菴羅

タマリンド *Tamarindus indica* L. Āmla, Āmlika

アムラノキ *Spondius pinnata*, Āmrāta(ka) 菴沒羅, 阿末羅

などがあり, 漢訳仏典ではこれらがときどき混乱しているのが見うけられる。本節の場合もその原典にさかのぼらなければ是非の判断はつけられないが, 訳註に āmala(ka) が多いことから, 一応アンマロクをとっておく。果物としては当時すでにマンゴーの方が味, 形ともにアンマロクよりはるかにすぐれていたといえよう。

筆者のような信仰心の浅い人間は, いづれは地獄行きであろうが, 「閻魔城には四面に鉄塔があり, その鉄門の左右には幢(ふき流し)があって, 尖端に人頭を安置している。この人頭は閻魔城におとされた人間をみると掌中の菴羅果の如く」(仏説地藏菩薩発心因縁十王經), 絶対にうそはつけぬという。

#### 17) ミロバランノキ *Terminalia chebula* Retz. Haritaki 訶梨勒樹

ミロバランは果樹, 薬樹として仏典によく引用されているが, 材もまたインド, 東南アジアでは重要な樹木である。樹高10~25 m, 樹幹直径0.5~1.0 m に達する常緑喬木, 果実は核果で直径3~5 cm の長楕円



写真20 *Terminalia chebula* R. ミロバラン  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

形、成熟すると黄金色になる。果皮はタンニンの含有量多く（40～50%）、鞣皮や染色用原料としてインドの重要林産物である。種子は食用。古くから生薬として有名で、解熱、下痢、下痢止めに効果があるといわれている。

「釈迦成道後7日にして、風病を發するも、帝釈天訶梨勒果をとり仏に奉ぐれば、風病直ちに止む」（衆許摩訶帝経巻5）。

「熱病の下薬には訶梨勒果を以てす」（金光明経巻32）。

インドのベンガル州、デカン高原からセイロン、ビルマ、マラヤに分布する。インドではミロバラン（mylobalan）、ビルマではパンガ（panga）、カンボジアではタオール（taour）と呼び、気乾比重0.95位、褐色で木理はラワンにかなり似通っている。堅くて強く、建築、家具、車輛用材、とくに工具の柄に愛用されている。

マラヤでも第2級用材として用途が広い。*Terminalia* spp. の比重は0.3～0.9の広い範囲にわたっているが、低比重のものは最近日本にもかなり輸入され、合板その他に使用されはじめている。

同属の *T. catappa* L.（モモタマナ）は Indian almond と呼ばれ、生食、焼食して美味である。

#### 18) ベルノキ *Aegle Marmelos* Corr. Bilva, 毘醯勒果？

インド原産のミカン科の落葉小喬木で、いままでの所、ナガエミカン *Feronia elephantum* と共に仏典にあらわれる唯2種類の柑橘類である。

柑橘類は現代のインドでは重要な果樹であるが、古代インドではあまり知られていなかったようである。葉は写真21でみるように3出複葉で、樹枝に棘をもち、花に芳香がある。果実は直径5cm前後の球形または楕円形で、芳香があり生食、シャーベット、マーマレード、塩漬にする。マルメロシンを含み赤痢の良薬といわれている。果皮はインドサラサの黄色染料の原料である。



写真21 *Aegle Marmelos* Corr. ベルノキ  
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden)

ビル (Bael) と呼びインド全域に自生または栽培されているが、ヒマラヤ西部、アッサム州に多い。寺院によく植えられる。

材は白色で堅く、気乾比重 0.9 位、伐木の時には芳香を発する。建築、彫刻、その他細工物用。生長の度合が変化しても比重にあまり変化のないのが特長である。

いままで数種の果樹について説明したが、これらの果実を主題にした2, 3の仏話を紹介しよう。

インドボダイジュの下で悟りをひらいた釈迦は、神々のすすめに従ってヴェーナーラシ (現ベナレス) のムリガダーバ (鹿野苑) で、5人の比丘に自己のえた真理について最初の説教をし、ついで、カーシャパ (迦葉) 兄弟のもとに滞在する。

ある朝、迦葉が朝食の準備のできたことをしらせにきた時、釈迦は迦葉を先に食堂に行かせ、彼がそこにゆきつく前に、閻浮提におもむき閻浮果 (ジャンボランの果実) をとって帰り、迦葉にすすめる。迦葉は釈迦の神通力に内心大いに驚いたが、それ位ではまだまだ心服しない。次の日の朝、釈迦は同じようにして弗婆提から阿摩勒果 (アンマロクの実) をとってきて迦葉にすすめ、3日目には拘耶尼から訶梨勒果 (ミロバランの実) を、4日目には憍曇波から天然のうるち米をとってきて迦葉にすすめる。釈迦はその他いろいろの奇蹟を示したので、さすがの迦葉も、その偉大なる神通力を認識して釈迦に帰依する。この物語りは仏本行集経、過去現在因果経、衆許摩訶帝経、方広大莊嚴経などに収録されている有名な話であるが、仏典によっては上記の四州とスメール山、阿摩勒果と菴羅果、訶梨勒果と毘醯勒果などがいれかわっているものもある。

戦前派の人には、次の話はなじみ深いものであるが、果実の名はあまり知られていない。

昔、大海にミヅチ (竜の1種) の夫婦が住んでいた。妻のミヅチが病気になり、手長猿の生肝が食べたくなった。一旦そう思いとむと、心常に安らかでなくそのため顔色は悪くなり、その身は次第にやせ細った。夫のミヅチが心配してたびたび原因をたずねても、仲々打明けなかったが、ついにその真相を話す。愛妻をたづねた夫のミヅチは直ちに生肝を求めて海岸におもむく。丁度よい具合に1匹の手長猿が1本のウドンゲの大本の上でその実を食べているのがみえた。「やあ先生、樹上で何をしているのか」「ウドンゲの実を食べているのだ」「むこう岸には大きな森がある。そこには菴羅果 (マンゴーの実)、閻浮果 (ジャンボランの実)、頗那婆果 (パンの実)、鎮頭迦果 (インドガキの実) などが無数になっている。どうだ連れていってあ

げようか」。手長猿は大喜びでミヅチの背にのって海を渡るが、愚鈍なミヅチは途中でその真の目的を話す。「それは残念なことをした。はじめにいてくればよかったのに。肝はウドンゲの枝にかけてきた」。という訳で元の海岸にもどってしまう。

この話は仏本行集経や六度集経にでている物語りで、もちろん仏と仏を害するもののたとえ話であるが、熱帯の名果、薬果がそろって登場する一幕である。

「衆生あり。過去の業の故に盲とならば、正に陀羅尼を抄写し、その業を悔過し、訶梨勒果、阿摩勒果、昆醯羅果、甘草等5種の薬と蜜で業を調合し、眼上に塗り、77日仏を念じ発願すれば、悪業消滅して清浄の眼をえん」(大方等大集経一卷44, 日藏分中3帰済竜品第12)。

「若小なるも、壮なるも老ゆるも皆死に帰すること猶果の熟して、自然地に落つるが如し」(菩薩本縁経卷中)。

19) ア サ ナ *Terminalia tomentosa* Bedd. Asana, 阿婆那樹

方广大莊嚴経一卷1, 兜率天宮品第2でアソカ、コービダーラ、サーラ、ムチャリンド、パータリ(後出)、カルニカーラ(後出)と共に、天宮を飾る宝樹である。

樹高約30mに達する喬木で、葉は楕円形または卵形で互生。インドからビルマにかけて生育し、インドでは全土に分布する重要樹種である。普通ローレル(laurel)とよぶ。チャンプ(champ, *Michelia champaka* L.)と共に、生長が遅いとporeが多く、組織が海綿状に弱くなる性質があるが、健全材は気乾比重約0.85で比重の割に加工性がよい。辺材はクリーム色、心材は淡褐色または赤褐色であるが、黒色の斑条のあらわれたものは非常にきれいで、高級家具やキャビネットに用いられる。一般に材質が強く、構造材に好適であり、車輻、電柱、枕木、杭木、農器具あるいは工具の柄としても利用されている。

ビルマでもlaurelまたはタウクヤン(taukkyan)とよび、樹高30m、樹幹直径約1.0mに達する重要樹種である。タイではロクファ(rokfa)とよび、よくチークと混生しているが、気乾比重0.9でやや重い。いずれも木理がwalnutに似ているが、伸縮が大きく接着技術に注意を要するとされている。

20) アルジュナ *Terminalia Arjuna* Bedd. Arjuna, Kakubha, 阿順那樹, 柯俱婆樹

仏本行集経一向菩提樹品第30によると

「釈迦は苦行6年の末、ナイランジャンナー河をわたり、インドボダイジュの下へ進もうとするが、身体衰弱して渡りきることができない。これを見てアルジュナの樹神が枝をたれ、釈迦を助けて河を渡らせた」と



写真22 *Terminalia Arjuna* Bedd. アルジュナ  
(W. Pakistan, Lahore, Laureth Garden)



いう。

*Terminalia* spp. の一種カーラカ (Kalaka, 迦羅迦樹) についてもこれに似た話があり (過去現在因果経一卷4, 化三迦葉, 中本起経一還致国品第6), しばしば釈迦の難儀をたすけている。

大般涅槃経一卷6, 如来性品第4の3にはカーラカが次のように引用されている。

「カーラカの林の中に1本のティンバル (インドガキ) の木があった。この両樹種の果実はよく似ているので区別がつけにくい。果実が熟したころ, 1人の女性がきてこれをとって市場で売ったが, 小供達や凡愚は区別がつかないままカーラカの実を買って食べ命終る。大衆中の八不浄法 (縁起によって生ずる現象, たとえば煩惱など) もまた, これと同じである。衆中の多くはこの八法をうけるが, 唯1人の清浄持戒 (縁起を脱したもの, たとえば解脱) はこの法をうけず。しかも互に離れない。丁度カーラカ林中のティンバル果のようなものである」。

さてアルジュナは樹高20~25mに達する喬木で, 葉は長楕円形, インドのヒマラヤ地区からデカン高原, セイロンに生育し, 広く東南アジア, アフリカに分布している。インドではアルジュン (arjun) とよび, 重要樹種の1つで, 辺材は帯紅白色, 心材は褐色であるが, よく暗色の斑条があらわれるので, 選材すれば高級家具やキャビネットなどに利用できる。気乾比重 0.75~0.8, 衝撃やせん断に強い。一般建築用材であるが, 地区的に車輻, 農器具, 杭木, 工具の柄などにも利用している。

21) ナガエミカン *Feronia elephantum* Correa. Kapittha, 迦埤多羅樹

第1報総論の五樹の1つであるカピッターはそれほど大木にはならない。樹高はせいぜい15m, 樹幹直径0.3mまでの落葉樹で, 葉は羽状複葉。セリ科のウイキョウ (茴香) に似た芳香をもっている。果実は球形で食用になり, ジェリーにもする。

象がこの実を好むことから elephant apple ともいう。仏典にあらわれる数少ない柑橘類の1つである。



写真23 *Zizyphus jujuba* Mill. サネブトナツメ?  
(京都市内)



インド全域からセイロン、東南アジアにかけて自生し、栽培されている。材はあまり利用しないが、ビルマではチィ (thi) と呼び、気乾比重 0.8 位で一般建築に用いる。

22) イヌナツメ *Zizyphus Jujuba* Lam. Kuvala 棗樹

教義よりもむしろ大小の比較に引用されている場合が多い。

「始終なき輪廻の世界に輪廻する者の父母の数は、全インドの大地を棗の種子ほどの丸さにしてもおいつきません」(Theri-Gātā: 早島鏡正訳 長老尼の詩 仏典 I)。

また、Lalita-vistara (渡辺照宏訳 仏教, 岩波文庫) や仏所行讃によると、ゴータマ菩薩はナイランジャー河畔のウルビルバーで断食してはげしい苦行にはいるが、

「はじめは1日にナツメの実を1粒づつ、次には米1粒づつ、さらにつぎにはゴマの実1粒づつをとり、最後に全く食物を断つ」

イヌナツメは樹高約15m、樹幹直径0.3~0.4mになる喬木で有棘、葉は長楕円形葉脈が3本きれいに流れているのが特長で、家畜の飼料になる。花は帯緑白色で芳香があり、果実は長楕円形で生食でき、種子、樹皮は薬用。インド、セイロン、東南アジア、中国、オーストラリアなどに広く分布しているが、インド、ビルマ、タイなどでは果実を目的とするほか、*Butea frondosa*, *Schleichera trijuga* (後出) と共にシェラック樹脂の原料となるラック虫の培養を目的として植栽している。

インドではベル (ber), ビルマではジイ (ji) とよび、材は気乾比重 0.77 位でろくろ細工に適する。紀元前約3000年 Harappa 人は当時すでにこの木が衝撃、磨耗に強く、丸太のまま乾燥しやすいことを知っていたらしく、その遺跡からは、臼や乳鉢などにこの材を使っていたあとが発見されている。写真23は同属のサネブトナツメ *Z. jujuba* Mill. (中国原産) ? で、葉、果実ともにイヌナツメによく似ている。

23) タマリンド *Tamarindus indica* L. Āmla,

第1報の総論で述べたタマリンドは、樹高約25m、樹幹直径約1.0mに及ぶマメ科の常緑喬木で1属1種、葉は写真のように偶数羽状複葉である。春から初夏にかけて淡黄色の花が腋生総状花序につき、秋にマメ科特有の蒴果ができる。この蒴果は柔かい果肉ででき、甘く酸味があり、生食できるが、乾燥して貯蔵しあるいは粉末にして清涼飲料剤にもする。古代インド時代からの主要な食料の1つであるが、材も重要である。

アフリカ原産? であるが広く熱帯地方に分布している。インドではイムリ (imli), ビルマではマギイ



写真24 *Tamarindus indica* L. タマリンド  
(Ceylon, Paradeniya, Royal Botanical Gardens)



写真25 同 前  
(Ceylon, Colombo, Vihara Maha Devi Park)



写真26 *Cocos nucifera* L. ココヤシ  
(台湾, 向井朝彦氏写)

(magyi), ヒリピンではサンパロック (sampalok) とよぶ。気乾比重1.0位で熱帯材中でも重い方に属し、耐久性よく農器具用によく使われる。

24) ヤシ (ココヤシ) *Cocos nucifera* L. Lāngalin, Nalikerā, 楞伽利樹

原産地については諸説があり、はっきりしていないが、熱帯の海岸地域には広く分布し、植栽されている。樹高は25m以上にも達し、葉は頂生羽状複葉、オーギヤシと共に熱帯の万能有用樹で、葉は屋根葺用、カゴ、ムシロなどの材料、幹は建築、工芸用、未熟果は飲用、熟果のコブラからはヤシ油がとれ、食料、化粧品、石鹸、医薬工業品の原料となる。

仏典にはたびたび登場するが、たとえば

「スメール山に上妙の葉あり。楞伽利と名づく。人これを服すれば念々に滅すといえども薬力の故を以て患害にあわざる如し。

須陀洹 (Srotāpanna: 仏弟子の到達しうる初等の階位の1つ、三界の見惑を断じえたる者) の人もかくの如し。悪国に生ずといえども道力をもつての故に悪業をなさず」(大般涅槃經一卷 29, 獅子吼 菩薩品第11の3)。

25) ジンコウ *Aquilaria Agallocha* Roxb. Agarū, Aguru 沈水

古くから香木として有名な和名沈香, 別名伽羅が本種であろうと推定されている (イチイ科・属のキャラボク *Taxus cuspidata* S. et Z. var. *nana* Rehd. は別種)。香木の方は重くて水に沈むことから沈水または沈水香とよばれ、漢訳仏典は主に沈水の名ででてくる。サンスクリット語 agarū もまた水に沈むという意味をもっている。

インドのヒマラヤ東部, アッサム州原産, 樹高 30 m 以上, 樹幹直径 1.0 m にも達する常緑喬木である。葉はほぼ披針形で, 小さなかわいい白色の花が散形花序につく。



写真27 *Aquilaria Agallocha* Roxb. ジンコウ  
(President, Forest Research Institute, Dehra Dun,  
および Dr. D. Narayanamurti の御好意による)

インドでは aloe wood とよび、気幹比重 0.4 位の軽軟材で、木肌は淡黄白色を呈し樹脂分を含み芳香をもつが、とくに樹脂精油分の多い部分は変色して、重く、強い芳香を発し、香木として栴檀と共に珍重される。インドや中国では古くから仏塔や寺院に建材として用いられていたらしく、家具、器物、彫刻、薫香材料としても広く利用されている。

第1報の総論に述べたように、仏典では他の香花、香木と共に神話的表現への引用が多く、

センダン *Santalum album* L. Candana

タガラ *Tabernaemontana coronaria* Willd. Tagara

と共に極楽世界を象徴し（大無量寿経）、如来の解脱や教え、経を信奉する人々への慶祝樹である（法華経その他）。

「1 筐に 4 種の香、1 に沈水、2 に多伽羅、3 に牛頭栴檀、4 に多摩羅葉香を盛らんに 4 香合して 4 両（両は重さの単位）あり。4 姓（バラモン、王族、庶民、隸民）の人、4 種の衣を筐中におき、数日を経て各自持去るに、4 香は銖両（僅かの重さ）もおれず、しかもこれらの衣中に香ある如く、もし菩薩あって四無量（慈、悲、喜、捨—いずれも利他の心）を修せんに、所住の国にしたがい、その土の人民各々種々の功德を成就して、しかも菩薩において損滅する所なし」（大方等大集経一卷23虚空目分中四無量心品第4）。

奈良県談山神社拝殿の格天井は寺伝ではキャラで作られているが、これはイチイ科のキャラのようである。

26) アンソクコウノキ *Styrax Benzoin* Dryand. Kālānusārin, 安息香樹

樹高 6～10m の落葉小喬木で、葉は卵形または楕円形で互生。7 月ごろ黄色または淡紅色の花が腋生総状花序につく。樹皮は茶褐色で、秋に樹皮に傷をつけて滲出する樹脂を採取、乾燥する。これを安息香 (Benzoin, gum benjamim, (梵) Guggula) といい、安息香酸を主成分とし芳香をもち、薫香または香水を作



写真28 *Styrax Benzoin* Dryand. アンソクコウノキ  
(京都市内)

る。インド、タイ、スマトラ、ジャワに分布し、香料、薬用としての利用が主で、材はとくに利用されない。安息香は乳香 (olibanum: *Boswellia* spp. の樹脂) その他の薫香、香水と共に、古く紀元前1300年ごろから、中近東、インドあるいは中国の王宮や寺院で邪気を払うものとして盛んに愛用され、タイ、ビルマあたりから輸入していたようである。安息香薫香には樹皮をまぜているため黒っぽい、安息香自体は白っぽいものが良質で、タイ産が最上、カルカッタ産がこれに次ぐといわれている。また安息香酸には防腐、殺菌性があり、現在は主に合成品がジュース、シロップ、醬酒などの防腐剤として使用されている。

仏典では神話的な取扱いが多く、第1報総論でのべたように、タマラ、ウラガサーラチャンダナ、タガラなどと共に極楽世界に薫じ、また一切衆生喜見菩薩が瞑想にはいるや、堅黒細抹栴檀香としてマンダーラヴァの花、ウラガサーラチャンダナと共に虚空に満ちてこれを慶祝する。この香の価値たるや6銖 (銖: 重さの単位, 0.67 gr) といわれている。僅少の意味) をもって、この娑婆世界に匹敵するという。(法華経一葉王菩薩本事品)。

第1報でも説明したように、漢訳仏典で随時檀香、細抹堅黒栴檀と訳されているカーラーアヌサーリンチャンダナはカーラーアヌサーリン (安息香) とチャンダナ (栴檀) に分けた方がナチュラルであると筆者は思う。

27) インドニューコーノキ *Boswellia serata* (thurifera) Roxb. Kunduru, Kundura, 薫陸香樹  
仏典にたびたび現われる香料樹種の1つである。樹高10~15m, 樹幹直径0.4~0.6mになる喬木で、葉は披針形または卵形の小葉からなる奇数羽状複葉。花は白色または紅色で芳香をもつ。樹皮から柔かい、芳香をもつ粒状の樹脂を分泌する。これを乳香 (olibanum, (梵) Turuska, 兜楼婆) と呼び、安息香、栴檀、多伽羅、竜腦と和合するとすぐれた薫香をえ、白茅香あるいは霍香というのはこれを指すといわれている。

ヒマラヤ西部森林地帯に自生し、ビハール州、デカン高原に多い。

28) パータリ *Calophyllum inophyllum* L.? Pātali(a), 波吒利樹, 波羅々樹  
「(この経を信奉するもの) 清浄の鼻根を以て、スマナス、ジャーティカ、マツリカ、チャンパカ、パータリの花の香、赤蓮華、青蓮華、白蓮華の香、栴檀、沈水、多摩羅葉、多伽羅の香、その他もろもろの香をことごとくかぎわけて分別せん。(丁度そのようにすべてのものを分別せん)」(法華経一法師功德品)。

「もしこの経巻を書きて、チャンパカ、スマナス、パータラ、ヴァールシカ、ナヴァマーリカの花の香油を以て供養せば、うる所の功德また無量ならん」(法華経一葉王菩薩本事品)

「私の両腕は、以前は円いかんぬきにも似て立派であったが、今や老いのために、パータリの花のしぼんだように弱った。真実を語る人のことばに誤りはない」(Theri-Gāthā: 早島鏡正訳 長老尼の詩 仏典 I)。  
など、大体花が主役であるが、インド古代文学でも花の香がよく引用されている。

パータリの学名については、いろいろの説があるが、結局

*Stereospermum suaveolens* DC. (セندانキササゲ) と

*Calophyllum inophyllum* L. (テリハボク)

が有力で、とくに後者とする説が強い。

*S. suaveolens* は樹高10~20mの常緑喬木で、葉はセندانに似て広楕円形鋭尖の小葉よりなる奇数羽状複葉、淡紫色または暗紫色の花が沢山咲き、芳香を発する。インド全域、セイロンに生育し、インドではパラル (paral) またはパドリ (padri)、ビルマではキウエ マギオレン (kywema-gyolein) とよび、材は帯黄褐色で耐久性があり、気乾比重約0.74。一般建築用材として使われている。

*C. inophyllum* は樹高15~18m、樹幹直径1m以上に達する喬木で、葉は長楕円または卵形。初夏に小さな雪白色の4弁の花が総状花序につき、とくに開花時に強い芳香を発する。種子からは油を採り灯油とし、樹皮は煎じて駆虫薬とする。したがって、この木の方が仏典の内容に近いといえよう。

インド全域からマラヤ、太平洋諸島、台湾、小笠原諸島に分布する。ポリネシア諸島では神聖樹として寺院に植栽する。

インドではプーン (poon) とよび、心材は切削直後は淡黄褐色から赤褐色であるが、空気にさらされると、きれいな赤褐色になり、交錯木理によるリボン状の杣をだす。気乾比重0.65~0.75で、重さの割に強く、耐久性があり、加工もしやすい。建築、土木構造物、船のマスト、独木舟、漁船、カヌーなどに用いる。杣目のきれいなものは高級家具用。

ビルマではボンネット (ponnyet)、マラヤではビンタンゴールラウト (bintangor laut)、インドネシアではニャンプルン (njanplung)、ヒリピンではビタオグ (bitaog) などと呼んでいる。

最近日本で家具、合板用材としておなじみになった Bintangur (Bintangor) という名は、インド、マレーシア、インドネシア地区での *Calophyllum* spp. の総称で、種類が多く、気乾比重も0.4~0.9の範囲に

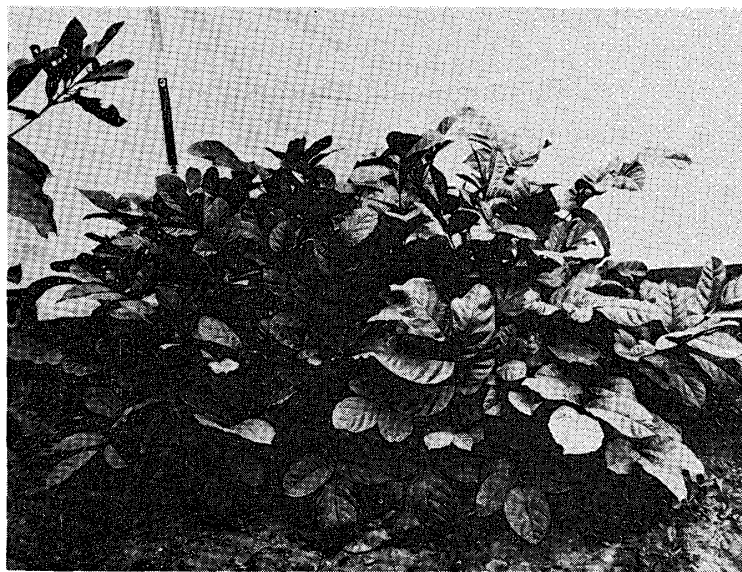


写真29 *Stereospermum suaveolens* DC. セندانキササゲ  
(President, Forest Research Institute, Dehra Dun,  
および Dr. D. Narayanamurti の御好意による)



写真30 *Calophyllum inophyllum* L. テリハボク  
(Singapore, Botanical Gardens)

わたっているが、家具構造用材としてのピンタングルは、*C. inophyllum* などの中比重のもので、前述したように Jongkong とともに現在日本の家具用材としてかかせぬ樹種である。木肌が mahogany に似ているので、*Cedrela Toona* とともに Indian mahogany と呼ばれている。

通称 mahogany には多くの種類が含まれているが、本来は *Swietenia mahogany* で、中南米産。樹高 50m, 樹幹直径 2.0m に達する巨木で、気乾比重約 0.6, 力学的性質がすぐれており、家具構造材、突板として代表的樹種の 1 つである。同属の *S. macrophylla* は中南米からジャワにはいった樹種で、現在東南アジアから輸入される通称 mahogany はほとんどの樹種と考えられている。材質が *S. mahogany* よりやや劣り、光沢が少ない。通称 African mahogany は *Khaya* spp. である。

西半球では *Calophyllum* spp. を総称して Santa Maria と、いうもやさしき名をつけているそうである。

## 29) ビルマネムノキ *Albizzia Lebbek* Benth. Śirisa, 尸利沙樹, 印度合歓

インド、セイロンから東はビルマ、マラヤ、中国、オーストラリア、西はアフリカまで分布している熱帯樹で、樹高約 15m, 樹幹直径 60 cm に達する落葉喬木である。葉は長楕円の小葉からなる マメ科特有の羽状複葉で、初夏に 25 mm 位の細い雄蕊が長くつき出た、帯緑黄色から銀白色の花が咲き芳香を発する。庭樹や並木に利用するが浅根性で風に弱い。インドでは普通にある樹木で、ココ (kokko) またはシリス (sirisi) とよび、気乾比重 0.6~0.7。心材が walnut に似ているので Indian walnut ともいい家具、内装材料として重要な樹種である。波状木理、交錯木理が多く、切削面に特有の縄斑があらわれるものは高級家具に用いられる。製材の際にのどを刺激するが、これは 1 時的で有害ではないといわれている。樹膠から香料がとれる。ビルマでも kokko、タイではブルク (pruk) とよび、比重はインド産よりやや軽く、家具、車輛、羽目板用材となる。



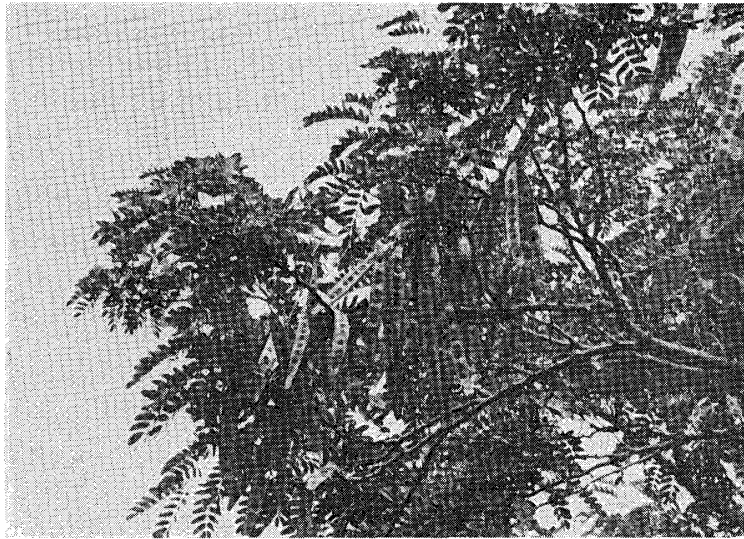


写真31 *Albizzia Lebbek* Benth. ビルマネムノキ  
(Delhi, Buddha Jayanti Memorial Park)

第1報総論の人間平等論ではこの花の特長が引用されている訳であるが、仏教詩人マートリチェータの讃仏詩集 *Śatapañcāsatka* (奈良康明訳 百五十讃, 仏典I) でも

どんなものにもゆるぎない  
あなたの固い決意の前には  
たとえ大地は重くても  
シリーシャの葉の先の軽さとちがわない

と、その特長がうたわれている。

シリーシャも仏典によく顔を出す樹木の1つであるが、仏本行集経や出曜経によると、

昔、一団の行商が羅刹女の術策におち、あやぶくみなごろしにされようとした時、1人の賢い商人がシリーシャの木に登り、羅刹女の奸計を観望して難をのがれるが、案外昔から偵察樹木として利用されていたのかもしれない。また、衆許摩訶経巻12には次のような話もある。

昔、スンドラマヌバカ (*Sundaramānavaka*) という貧乏で正直な若者がいた。ある時 ガールフレンドから花をとってくるよう頼まれ、うれしくてうれしくて夜半寝ることができず、明方になってぐっすりと熟睡してしまう。ハッと眼を覚ました時には、すでに日は高く昇り、あわてて花を探したが、きれいな花はすでにみな摘み取られてしまっている。買うお金もない。仕方なくシリーシャの花を持って彼女の許におもむくが、彼女は喜ばず、1日中花を求めて走りまわされたあげく、すっかり愛想をつかされてしまう。彼はその後出家するが、これが落語だとスンドラマヌけなバカな話はないという落ちになるう。

### 30) キンコウボク *Michelia champaka* L. Campaka, 瞻蔔, 金厚朴

香花、香油樹木として、今までたびたび紹介したが、樹高約30 m、樹幹直径1.0 mに達する常緑の大木で、葉は披針状卵形、花は黄色～黄橙色で芳香があり香水の原料となる。樹皮や葉にも芳香がある。インドヒマラヤ地区原産、ネパールからジャワに分布する。インドではチャンプ (*champ*)、ビルマではサガワ (*sagawa*)、タイ、マラヤではチャンパカ (*champaka*) とよぶ。インドではアッサム、ベンガルに多く、心材は黄褐色を呈し、気乾比重0.5位、木理通直で加工しやすく、高級家具、キャビネット、室内造作用として重要な樹種である。

「人の瞻蔔林に入りて唯瞻蔔をかぎて、余香をかかざるが如し。是の如くに、若しその室にいれば仏の功德の香のみをかぐ」(維摩詰所説経—観衆生品第7)。



写真32 *Michelia champaka* L. (キンコウボク)  
(Ceylon, Paradeniya, Royal Botanical Gardens)

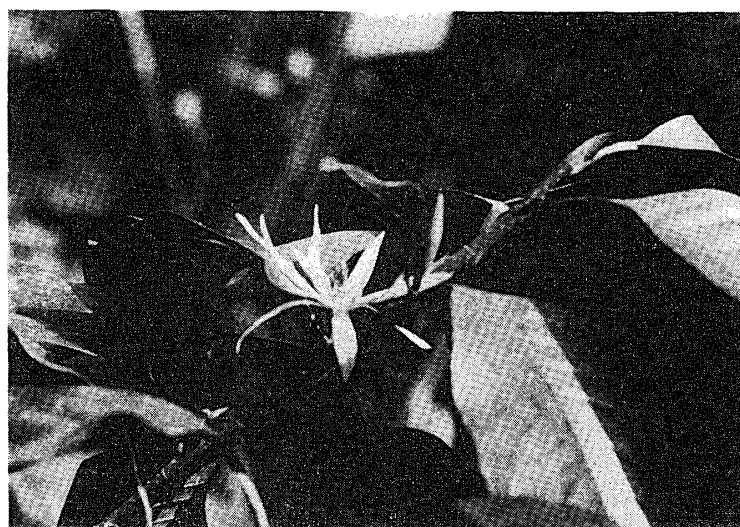


写真33 *Michelia longifolia* Blume. ギンコウボクの花  
(京都植物園)

「須曼，瞻蔔，阿題目多伽 (*Gaertnera racemosa* Roxb.) の薫油を以て，常にこれを燃さば，かくの如く供養するもの，無量の功德をえん」(法華経一分別功德品)。写真33は同属の

ギンコウボク *Michelia longifolia* Blume

で，ギョクランともいい，花が少し白っぽいことを除いて，チャンパカとほとんどかわらない。

31) ミムソープ *Mimusops elengi* L. Bakula, 薄拘羅樹

仏典ではカスト否定論(第1報参照)や他の香花とともに一寸顔を出す程度であるが，樹木としてはなかなか有用である。樹高約12m，樹幹直径 60 cm 位の常緑高木で，白色の小さな花をつける。花には新酒の香りがあり，美人酒を含みてそそげば忽ち花開く。故に酔花というといわれている。香水の原料。果実は食用，種子から油，樹皮からはタンニンをとる。また辺材は赤褐色，心材は暗褐色を呈し，気乾比重 0.9 ～ 1.0 で重くて強く，耐久性もあり，土木，建築構造材に適するという万能選手である。





写真34 *Mimosa elengi* L. ミムソープス  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

インド、ビルマ、セイロンに分布し、インド、ビルマではカヤ (kaya)、インドネシアではミムソープス (mimosops) またはタンジュン (tandjung) と呼ぶ。

32) カルニカーラ *Pterospermum acerifolium* Willd.? Karnikāra, 迦尼迦羅樹

カルニカーラの花はインド古代文学では恋花として、また仏典では香花としてよく引用されるが、その樹木名については諸説があり

*Pterospermum acerifolium* Willd. (モミジバウラジロ)

“ *suberifolium* Lam.

*Cassia fistula* L. (ナンバンサイカチ)

などがあげられているが、前者が最も有力である。しかし、中阿合経一第1得経第4によると

「頻頭歌羅華黄にして黄色あり、黄にみえ黄に光る如く、迦尼迦羅華赤くして赤色あり、赤にみえ赤に光る如く、……」とあり、*Pterospermum* spp. の花がほとんど白色または黄白色系であることとつじつまがあわない。また頻頭歌羅華は *Pentapetes phoenicea* L. (アオギリ科、ゴジカ) で、花は本来赤色であり、これもつじつまがあわぬから、上の漢訳自体にも問題がありそうだが、ここでは一応 *P. acerifolium* としておく。

「諸比丘、仏の涅槃近きをきき、悲嘆するさま萎れしカルニカーラの花の如し」(仏所行讃一離車辞別品)。

「魔女、菩薩を媚惑することの不可なるを知り、カルニカーラ、チャンパカの花を菩薩の上に散じ、右邊三匝して去る」(方广大莊嚴經一卷9、降魔品第21)。

*P. acerifolium* は樹高20mに達する常緑高木で、葉は写真35でみるように羽状中裂形でかなり大形である。花は純白で芳香があり、インドのヒマラヤ西北部の山麓から東パキスタン、ビルマ、ジャワに分布する。インドではハティパイラ (hathipaila) とよび、材は赤色をおび気乾比重約0.72で、厚板、包装あるいは合板用材である。ビルマではタウンペトウン (taungpetwun)、インドネシアではマイエン (mayene) とよぶ。*Pterospermum* spp. は最近わが国にも輸入されている。

*P. suberifolium* は *P. acerifolium* によく似ているが、樹形がやや低い。インドデカン高原北東部からオリッサ州内陸、マドラス東部海岸、セイロンに多く、用途は *P. acerifolium* とほぼ同様である。*Cassia fistula* についてはすでに説明した。

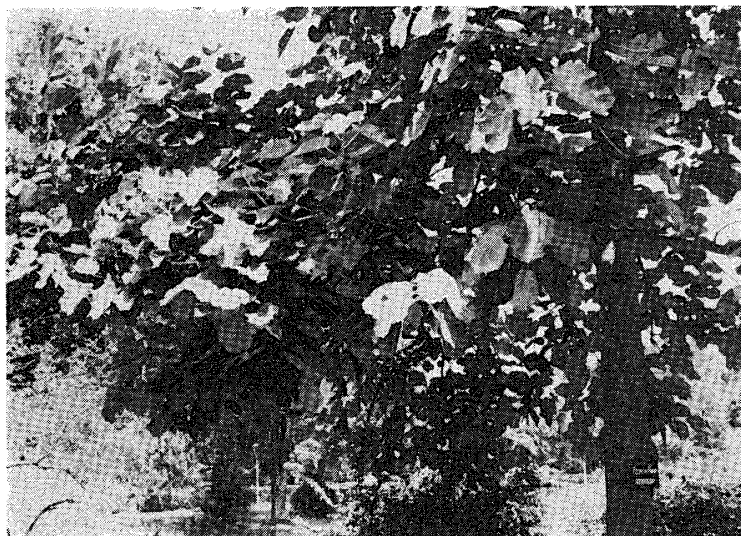


写真35 *Pterospermum acerifolium* Willd. モミジバウラジロ  
(W. Pakistan, Lohore, Laurenth Garden)



写真36 同 前  
(同 前)

今までたびたび説明したように、仏典には非常に多くの香花が引用されている。この中には用材として必ずしも重要でないが、仏教樹木としてかくことのできぬ樹種もあるので、以下これらのグループをまとめて説明しておく。

33) ジャスミン属 *Jasminum* spp.

- 1) マツリカ *J. Sambac* Ait. Mallaka 茉莉迦, Vārska 婆利師迦, Navamālīka 那婆摩利迦



写真37 *Jasminum Sambac* Ait. マツリカ  
(京都植物園)

仏典に最もよく引用される香花で、樹木名も多彩である。樹高1～3mの常緑灌木で、葉は楕円形。初夏から秋にかけて黄白色の花が短かい散形花序につく。芳香があり、これからジャスミン油をとり香水の原料にする。

「陸生華中婆利師迦を最上となす如く、諸の善法中不放逸の法を以て最となす」（大般涅槃經一卷24，光明遍照高貴德王菩薩品第10の1）とあるように、仏典香花中の最勝とされているが、実際にもクチナシ *Gardenia* spp., チョウジ *Eugenia caryophyllata* Willd. (Lavanga) とともに最高の香水花とされている。

インド、アラビア原産で、ペルシャ、セイロンから広く東南アジアに分布し、インドでは仏花として仏前に供養する。中国の花茶は、この花を乾燥して茶にまぜたものである。台湾の観光特急でサービスされる分厚いガラスのコップの花茶には、はじめは一寸辟易するが、二度、三度となれてくると、その独特の香りと味がなつかしく忘れがたい。

## 2) ソ ケ イ *J. officinale* L. Sumānas 須末那, 蘇摩那, 素馨

日本で広く信奉されている法華經、華嚴經、浄土三部經などに、とくによく引用されているスマナスは、多くの文献では単に *Jasminum* とされているが、この属の中からインド（原）産で芳香のあるものを選ぶと *J. officinale* となり、漢訳仏典でも須摩那、素馨が混用されていることから、まずこの種に間違いないと考えられる。花を悦意花、妙意花ともよぶ。樹高1～3mの常緑灌木、葉は楕円鋭尖形の小葉からなる奇数羽状複葉で、対生。

春から秋にかけてマツリカの花に似た白色の5裂星状花冠の花が、頂生散形花序につき芳香を放つ。花から香水をとるが、その香マツリカにおよばずとされている。

インドのヒマラヤ、カシミール原産で、アフガニスタン、ペルシャに分布し、900～2,700mの高地に生ずる。

## 3) タイワンソケイ *J. grandiflorum* L. Jāti, 闍提

漢訳仏典では宝華、金錢華という花の名でもでる。高さ約1mに達する常緑の低木で、葉は楕円形または卵形の小葉からなる奇数羽状複葉。花はソケイに似ているが大輪で、ジャスミン属中最もきれいであるといわれている。ヒマラヤ、ネパール原産で香水の原料として各国で栽培されているが、耐寒性が弱い。

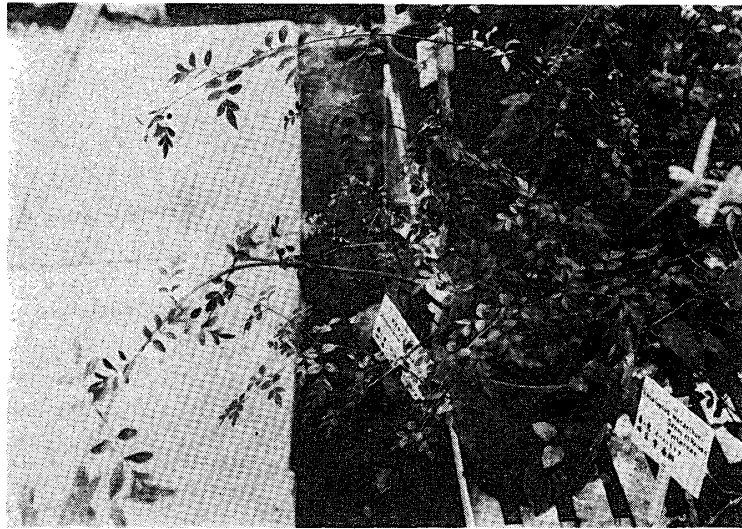


写真38 *Jasminum grandiflorum* L. タイワンソケイ  
(伊豆薬用植物栽培試験場)



写真39 *Jasminum gracillimum* Hook. f. ジャワソケイ  
(古曽部温室)

4) ユーティカ *J. auriculatum* Vahl. Yūthikā, 由提迦

写真39は同属のジャワソケイ *J. gracillimum* Hook. f. でとくに芳香が強いといわれている。

34) ヒツリキカ *Nyctanthes Arbor-tristis* L. Śephālikā, 畢力迦樹

第1報総論の一切衆生喜見菩薩焼身の物語で薰陸香樹、兜楼婆とともに顔を出す畢力迦樹には  
*Nyctanthes Arbor-tristis* L. (ヨルソケイ)

*Vitex Negundo* L. (タイワンニンジンボク)

*Eugenia caryophyllata* Willd. (チョウジノキ)

などの諸説があり、仏典の内容からはそのいずれをとるべきか判断しかねるが、*V. Negundo* には *Indra-hasta* または *Sindhuvāra*, *E. caryophyllata* には *Lavamga* という梵語が定着しているようであり、*N. Arbor-tristis* には *Sephalika* という地方名があるところから、これが本命と推定される。



写真40 *Nyctanthes Arbor-tristis* L. ヨルソケイ  
の葉と花  
(President, Forest Research Institute, Dehra Dun,  
および Dr. D. Narayanamurtiの御好意による)



写真41 同 前  
(同 前)

樹高約3mの常緑的落葉灌木であるが、時には樹高10m位の喬木になることもあり、枝に4稜があるのが特長である。葉は卵形対生、夏から秋にかけて鮮橙色の花筒、帯白色の花弁の、小さなたかつき形の花が頂生散形花序につき、夕方に満開して芳香を放つ。

インド原産、各国に栽培されている。

35) チョウジノキ *Eugenia caryophyllata* Willd. *Lavamga*, 丁香, 丁子

古くから香料として有名な木で、高さ4~15mの常緑の喬木、葉は卵形対生で、芳香をもつ。秋に淡紅または白色から深紅色に変る4弁鐘形の花が頂生散形花序につく。芳香があり、蕾を蒸溜したものが有名な丁香油で、香料として菓子、酒、化粧品などに用いるが、蕾を乾燥粉末にして用いることもある。モルッカ諸島原産で広く東南アジアに分布している。

丁香はすでに紀元前3000年頃には中国で使用していたことが伝えられているから、インドでもその頃東方から輸入していたものと考えられる。材は気乾比重0.7~0.9で、強度が大きく、造船、橋梁その他の構造材、農器具、工具の柄等にも用いられる。

36) タイワンニンジンボク *Vitex Negundo* L. *Indra-hasta* 因陀羅可悉多, *Sindhuvāra* 辛頭波羅

常緑の灌木で葉にも花にも香氣があり、仏典では香葉32味中第7に位置するといわれ、白皮葉ともいう。披針状の小葉からなる掌状複葉(主に3葉)をもち、写真43のように、小さな、鮮やかな淡紫色の花が、長

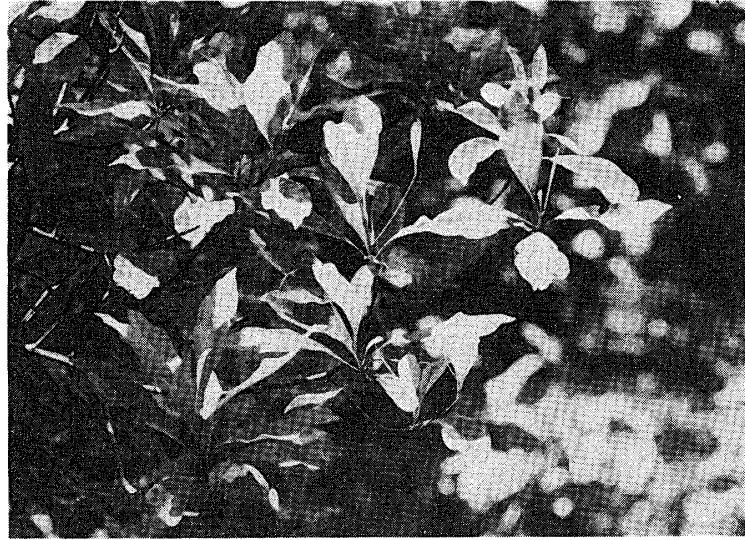


写真42 *Eugenia caryophyllata* Willd. チョウジノキ  
(Ceylon, Paradeniya, Royal Botanical Gardens)



写真43 *Vitex Negundo* L. タイワンニンジンボク  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

さ 20~30 cm の円錐花序につく。果実は球形黒色で薬用。インド、マラヤ、ヒリピン、中国に分布する。  
わが国でも暖地では露地に生育する。

以上、今まで仏典にあらわれた主な香花、香木について大体説明したが、これら実在の香樹および神話的香樹によって展開される絢爛たる一節を紹介すると、

以是清浄鼻根 聞於三千大千世界 上下内外 種種諸香 須曼那華香 闍提華香 末利華香 瞻蔔華香  
波羅羅華香 赤蓮華香 青蓮華香 白蓮華香 華樹香 菓樹香 栴檀香 沈水香 多摩羅跋香 多伽羅  
香 及千万種和香 若抹若丸 若塗香 持是經者 於此間住 悉能分別……持是經者 雖住於此 亦聞  
天上 諸天之香 波利質多羅 拘鞞陀羅樹香 及曼陀羅華香 摩訶曼陀羅華香 曼殊沙華香 摩訶曼殊  
沙華香 栴檀沈水 種種抹香 諸雜華香 如是等天香 和合所出之香 無不聞知。

(法華經一法師功德品)



37) アセンヤクノキ *Acacia Catechu* Willd. Khadira, 竭陀羅樹

阿含經—依提羅經で釈迦はいう。

「四諦（4つの真理：人生は苦であり、苦の原因は煩悩である。煩悩を消滅した状態が理想境であり、これを実現する方法は8つの正しい実践—八正道—にあるという真理）をはっきり了解せずに、苦を完全に追求しようといえ、これは根拠のないことである。丁度、カーヅラの葉を集めて器を作り、これに水をもってゆこうというのが根拠のないことであると同様である。これに対して、四諦をよく了解して苦を完全に追求しようというのはよい。それは丁度、蓮華の葉を集めて、水を盛ってゆきたいというのと同じである。理屈にあうからである」

カーヅラの葉は写真44でみるようにマメ科特有の、ほそい小葉の2回羽状複葉で、これでは如何に苦心しても水を盛ることはできないであろう。また Jātaka (平川彰訳 本生經 仏典 I) では、北パンチャラ (釈迦時代のインド16大国の1つ) の竜閣城の大池に住む竜の子妙生が、人間に変身して獵師ハラカに、南



写真44 *Acacia Catechu* Willd. アセンヤクノキ  
(Delhi, Buddha Jayanti Memorial Park)

パンチャラの呪師ヂュダが私をとらえようとして池の周囲にカーヅラの杭をうち、いろいろの色の紐をはりめぐらそうとしているから、これを防ぐように依頼する。これはカーヅラの本が強く、杭に適する性質を引用したものであろう。

アセンヤクノキは樹高 10~12 m, 樹幹直径 40~50 cm に達する常緑喬木。葉は2回複葉で葉柄の基部に1対の鉤形の棘がある。5, 6月頃に淡黄色の花が咲く。辺材はクリーム色, 心材は暗紅色で、この蒸気抽出物を乾かしたものをカテク (catechu) といい、タンニン40~60%, カテキン30~40%を含み、鞣皮剤および染料として利用される。局法阿仙薬はこの成分カテキンで、健胃、止血剤として用いられる。インドのヒマラヤ地区からマラヤまで分布する。

インドではカイル (khair) または クッチ (cutch), タイではシシャトヌア (sisiat-nua), ビルマではシャ— (sha) とよび、阿仙薬をとるのが目的で、用材としてはそう重要な樹種ではないが、気乾比重 0.9~1.0 位で、非常に硬くて強く、耐久性があるので農器具、車輪、工具の柄などに使用される。

38) ハナモツヤクノキ *Butea frondosa* Roxb. Palāṣa, Kimpśuka 堅叔迦樹

キムシュカについても諸説があるが、大体 *B. frondosa* と考えて差支えないようである。喬木性と蔓性の2種があるが、喬木性のものは樹高 12~15 m, 樹幹直径 60 cm に達し、葉は写真45では一寸わかりにく



写真45 *Butea frondosa* Roxb. ハナモツヤクノキ  
(Ceylon, Colombo, Vihara Maha Devi Park)



写真46 *Schleichera trijuga* Willd. セイロンオーク  
(W. Pakistan, Lahore, Laurenth Garden)

いがほぼ円形の小葉からなる3出複葉，淡紅と濃紅のツートンカラーの花が，総状花序につく。

シェラック樹脂を分泌するラック虫が寄生するので，樹脂の採取を目的としてインドのカルカッタ，アッサム地区，ビルマ，タイにかけて

***Schleichera trijuga* Willd.** (セイロンオーク)

*Zizyphus Jujuba* Lam. (イヌナツメ)



とともに栽培されている有用樹種である。また、樹液から bengal kino, parasu kino とよぶゴム質をとる。インドではパラス (palas) とよび、材は灰色を呈し、比較的軟かく、気乾比重 0.54。箱物、器物の柄などに用いる。

その紅い花の美しさが第 1 報のように、ヴァタ、ヴァクラ、タマーラ等とともに、カスト否定論の中に引用され、また観無量寿経や法華経では修行者たちの想念の世界に現われてくるが、教義的には雑阿含経一緊獸喩経の「キムシュカの喩」が有名である。

釈迦が祇園精舎に滞在していた時、ある比丘が、何を知り、何を見れば見清浄（心身の汚れを去った、すみきった浄らかな精神状態）をうることができるだろうかと思い、まわりの比丘たちにきいたが、その答は人によって皆異なっていた。彼はそのどれが正しいか判断に迷い、釈迦に教えを乞う。釈迦の答は次のようである。

「昔、ある人がまだキムシュカを見た事がなく、その有様を人々にたずねたところ、ある人はその木は真黒で火に焼いた杭のようであると答え、他の人は長く垂れ下るさまが丁度シリシアの木のようにであると答え、さらに他の人はその葉は青く、木は大きくニグロードのようであると答えた。これは人々がその時々に見、感じたままを話したからである。これと同様、比丘達の話もそれぞれの力によって煩惱を断じ、悟りをひらき、おのおのその見る所に従って説明するのである。帰するところの一つであるが、その過程に相異がある。だからお前も自分のみるところに従って修行すべきである」

なお、*S. trijuga* はインドでクスム (kusum)、ビルマでギョー (gyo) とよび、心材は帯赤褐色、気乾比重 0.95～1.09 という堅く重い材で、加工やや困難であるが、車輪とくにこしきや工具の柄などに用い、旋盤加工に適する。

### 39) シロバナヨウシュチョウセンアサガオ *Datura stramonium* L. Madana, 摩陀那

「海に入らんとするものは、先ず海に行く経路をよく知ることが必要である。海岸に達しても、そこには摩陀那という果樹があるが、これを食べてはいけない。これは酔（人）果ともよび、食べると狂酔して珍宝をうることはできぬ」（出曜経一巻 7，放逸品第 5 の 2）。

これは悟りへの道にもマダナ果の如く修行者をまどわすものの多いことを訓えたものであろう。

マダナの学名についても諸説があるが、stramonium はギリシャ語でキチガイナスビの意味であり、この点仏典の内容に一致する。葉は写真 47 のように卵形で、葉縁は大きい不規則な鋸歯。インド原産で、ヒマ



写真 47 *Datura stramonium* L. シロバナヨウシュチョウセンアサガオ  
(京都市内)

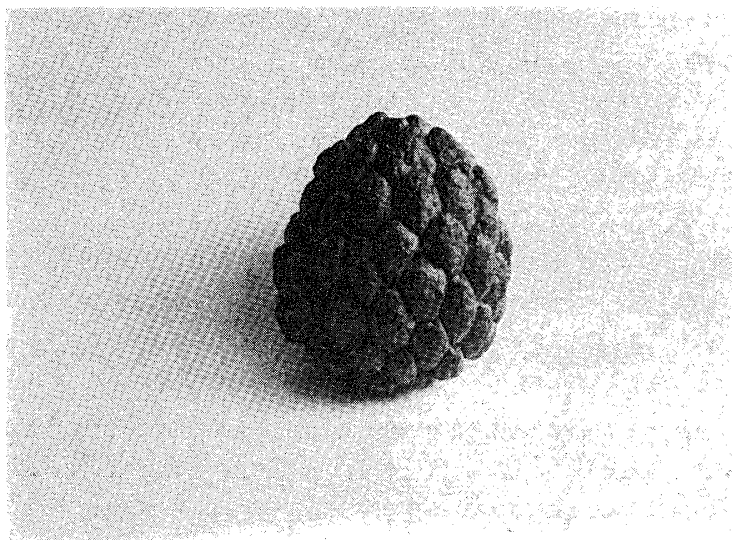


写真48 *Anona squamose* L. バンレイシの果実

ラヤ、カシミール、シッキムに多い。熱帯では樹高3 mに達する落葉灌木になるが、日本では一年生草本である。直径約10 cmの朝顔に似た白色の花が咲く。果実は卵形でその表面には写真でみるように太い刺が密生して、あたかも仏頭の螺髪のように見える。仏身32相または80種好に「頭、摩陀那果の如し」とあるのはこのことである。しかし、俗に仏頭果というのはバンレイシ *Anona squamosa* L. の果実（写真48）で甘くて生食でき sugar apple などと呼んでいる。

実際にマダナ果が総論でのべたように目の宝葉であるかどうかについては後日の調査にまきたい。種子はアルカロイドを含み、食べると狂人になる。

有吉佐和子著「華岡青州の妻」で、青州の妻加恵が薬草畑で

「この気違茄子は何に効きますのやろ」

と姑の於継に質問する。

「ああ、それを平川では気違茄子というのかし。なるほど葉の形、枝の形は茄子によく似ていますわの



写真49 *Datura alba* Nees. チョウセンアサガオ  
(京都市内)

し。けど川向うでは朝鮮朝顔というのやして。花の形が朝顔にそっくりやよってそういうのですやるの……  
…。お父さんらは曼陀羅華と呼んでなさるわのし。えらい毒の強いものやから間違うても口にいたらいか  
んと注意されてますのやして。笑いがとまらずに狂い死しますのやとし。気違茄子とはうまいことつけた名  
ァかしれませんのし」

と於継が答える。

このチョウセンアサガオ *Datura alba* Nees は高さ1 m位の草木で、花は白色、1名曼陀羅華ともいう。  
小説では青州は世界最初の人体麻酔薬通仙散にこの花を使っているが、もちろん *Erythrina indica* の曼  
陀羅華とは別物である。しかしながら、前者が人をして欲界的恍惚たらしめ、後者は無色界的恍惚たらしめ  
る点において、共通するものを持っているといえよう。案外こんなところから朝鮮朝顔を曼陀羅華と呼ぶの  
かもしれぬ。

#### 40) インドマツリ *Plumbago zeylanica* L. Pālaka, 波羅樹

落葉の灌木または藤本性で、前者は高さ約1 mに達する。葉は卵形または長楕円形で、白色5弁の花筒  
をもった可愛い花が咲く。全株有毒であるが、葉根は皮膚病などの民間薬として利用される。学名の



写真50 *Plumbago zeylanica* L. インドマツリ  
(京都植物園)

*Plumbago* には鉛毒を除くという意味があるという。

アフリカ、インド、マラヤなどの熱帯地方に自生するが、栽培している所もある。

「昔、一風変わった老婆がいて、山から波羅の葉を採取しては、これを売って生活していた。役人がこれを知って税金をかけようとするが、老婆はなかなか気が強い。お前のようなこつぱ役人では話にならぬ。王様の所へつれて行けという。そこで王様は老婆にたずねる。

“お婆さん。なぜ税金を納めないのか”

“王様、あなたは〇〇比丘を知っていますか”

“ああ、よく知っている。彼は阿羅漢だ”

“では××比丘を知っていますか”

“ああ、よく知っている。彼もまた阿羅漢だ”

“それでは△△比丘もまた知っていますか”

“ああ、彼もまた阿羅漢だ”

そこで老婆は声をはり上げていう

“この3比丘は皆私の息子たちです。大王は彼等から無量の功德をうけておられる。これは大王に税金を払っているようなものです。その上さらに私からも税金をとろうとされるのですか”

“ああ、わかった、わかった。もうよい”

という訳で、王は老婆の税金を免除する」

これは大莊嚴（經）論卷4に出ている仏話であるが、古今東西をとわず、われわれ庶民にとって、税金が一番悩みの種であることにはかわりはないようである。それにしても話のわかった王様の爪のあかでも煎じてのんで貰いたいような話である。

41) ビンバ *Momordica monadelpha* Roxb. Bimba, 頻婆（羅）

第1報で説明したように、仏陀や転輪王は32相をそなえねばならぬが、これに随伴して80種の相（80種好，80随形）をもかねそなえていなければならぬ。この中に

「口唇の色は頻婆果の如く赤くなければならぬ」

という1条がある。

また仏本行集經—魔怖菩薩品では、インドボダイジュの下で瞑想するゴータマボサツを誘惑しようとして、天女に変身した魔女が、次のようにかき口説いている。

「私達天女の身体は香潔な蓮華、また唇の赤く輝く色は頻婆果、舌は蓮華の葉のように薄く、両乳の百媚精妙なること石榴果のようであります」

大方等大集經一卷41，日藏分中星品第8の2で殊致羅婆菩薩が28星宿（星座），その姓，その属する天，祭るべき供物などを説明しているが，その南方第2星宿たる張宿には頻婆果を供え，西方第4星宿たる箕宿にはニグローダの樹液を祭る。張宿は十日に事を用い，この日に病む者は頻婆果と生蘇（牛，羊の乳を温め



写真51 *Momordica charantia* L. ツルレイシ  
(伊豆薬用植物栽培試験場)

たもの)を神に祭れば、7日にして癒をえん。また箕宿は四日に事を行なう。この日に病をえば、麻痺(かゆ?), 尼拘陀子(ニグローダの果実)を以て水神に祭らんに8日にして癒をえんと述べている。

28星宿は紀元前5世紀頃に中国で完成された赤道区分法とされているが、インドでもヴェーダにすでにその名がでており、その起源が中国かインドかまだ明かではない。日本では平安朝から江戸時代にかけて一般に用いられ、京都の祇園祭りの長刀鉾の欄干には東西南北にこの星座が飾られている。

ビンバはアフリカ、インドからマラヤまで分布するウリ科ツルレイシ属の植物で、葉は5裂鳥足状、花は白色、果実は光沢のある紅色を呈する円筒形閉果で、表面は平滑である。写真51は日本でもおなじみの同属のツルレイシ *Momordica charantia* L. で、果実は先端が嘴状になっている。熟果は黄赤色で開裂して中に紅色の果肉に包まれた種子があらわれる。果肉は甘い、果皮はにがいので一名ニガウリともいう。

(未完)

### 参 考 文 献

須藤 彰司, 南 洋 材 地球出版(株)(昭和45年)  
その他 第1報に同じ。

樹 木 学 名	科	属	種	頁
<i>Abies</i> spp.	マ ツ	モ ミ	—	35
<i>Acacia Catechu</i> Willd.	マ メ	ア カ シ ヤ	ア セ ン ヤ ク ノ キ	20, 55
<i>Aegle Marmelos</i> Corr.	ミ カ ン	ゲ ッ キ ツ	ベ ル ノ キ	37
<i>Aesculus indica</i> Hiern.	ト チ ノ キ	ト チ ノ キ	イ ン ド ト チ ノ キ	25
<i>Albizia Lebbek</i> Benth.	マ メ	ネ ム ノ キ	ビ ル マ ネ ム ノ キ	46
<i>Alstonia scholaris</i> Br.	キ ョ ウ チ ク ト ウ	ア ル ス ト ニ ア	七 葉 樹	25
<i>Anona squamosa</i> L.	バ ン レ イ シ	バ ン レ イ シ	バ ン レ イ シ	58
<i>Anthocephalus cadamba</i> Miq.	ア カ ネ	ア ン ソ セ フェ ル ス	キ ャ ダ ン バ	26
<i>Aquilaria Agallocha</i> Roxb.	ジ ン チ ョ ウ ゲ	ジ ン コ ウ	ジ ン コ ウ	42
<i>Artocarpus incisa</i> L.	ク ワ	パ ン ノ キ	マ ル ミ パ ン ノ キ	35
" <i>integrifolius</i> Auth.	"	"	ナ ガ ミ パ ン ノ キ	34
<i>Barringtonia actangula</i> Gaertn.	サ ガ リ バ ナ	サ ガ リ バ ナ		24
<i>Bauhinia variegata</i> L.	マ メ	ハ マ カ ズ ラ	フ イ リ ソ シ ン カ	20, 23
<i>Bombax malabaricum</i> DC.	パ ン ヤ	キ ワ タ	キ ワ タ	29
<i>Borassus flabellifer</i> L.	ヤ シ	オ ー ギ ヤ シ	オ ー ギ ヤ シ	18
<i>Boswellia serrata</i> Roxb.	カ ン ラ ン	ニ ュ ー コ ウ	イ ン ド ニ ュ ー コ ウ ノ キ	44
"    spp.	"	"	—	44
<i>Butea frondosa</i> Roxb.	マ メ	ブ チ ア	ハ ナ モ ツ ヤ ク ノ キ	20, 24, 41, 55
<i>Buchanania Latifolia</i> Roxb.	ウ ル シ	ヤ マ ソ ア ヤ	ロ ネ ホ	24
<i>Calophyllum inophyllum</i> L.	オ ト ギ リ ソ ウ	テ リ ハ ボ ク	テ リ ハ ボ ク	44, 45, 46
"    spp.	"	"	—	26, 45, 46
<i>Cassia fistula</i> L.	マ メ	カ ワ ラ ケ ツ メ イ	ナ ン バ ン サ イ カ チ	30, 49
<i>Cedrela sinensis</i> A. Juss.	セ ン ダ ン	チ ャ ン チ ン ノ キ	チ ャ ン チ ン ノ キ	27
" <i>Toona</i> Roxb.	"	"	イ ン ド チ ャ ン チ ン ノ キ	27, 46
<i>Ceiba pentandra</i> Gaertn.	パ ン ヤ	イ ン ド キ ワ タ	イ ン ド キ ワ タ	27
<i>Cocos nucifera</i> L.	ヤ シ	(コ コ) ヤ シ	(コ コ) ヤ シ	42
<i>Dactylocladus stenostachys</i> Oliv.	ノ ボ タ ン	ダ ク チ ロ ク ラ デ ス	ジ ョ ン コ ン	26
<i>Datura alba</i> Nees.	ナ ス	チ ョ ウ セ ン ア サ ガ オ	チ ョ ウ セ ン ア サ ガ オ	59
" <i>stramonium</i> L.	"	"	シ ロ バ ナ ヨ ウ シ ュ	19, 57
<i>Desmodium gangeticum</i> DC.	マ メ	ヌ ス ビ ト ハ ギ	タ マ ツ ナ ギ	19
<i>Diospyros choloxylon</i> Roxb.	カ キ ノ キ	カ キ ノ キ	ア オ コ ク タ ン	34
" <i>ebenum</i> Koen.	"	"	ホ ン コ ク タ ン	33
" <i>Embryopteris</i> Pers.	"	"	イ ン ド ガ キ	32
" <i>marmorata</i> Park.	"	"	ゼ ブ ラ ウ ッ ド	34
" <i>mollis</i> Griff.	"	"	ア オ コ ク タ ン	34
" <i>philosanthera</i> Blco.	"	"	シ マ コ ク タ ン	33
" <i>rumphii</i> Bakh.	"	"	"	34
<i>Dyera costulata</i> Hk. f.	キ ョ ウ チ ク ト ウ	デ イ エ ラ	ジ ェ ル ト ン	26
<i>Erythrina indica</i> L.	マ メ	デ イ コ	デ イ コ	20, 59
<i>Eugenia caryophyllata</i> Willd.	フ ト モ モ	フ ト モ モ	チ ョ ウ ジ	51, 53
<i>Feronia elephantum</i> Correa.	ミ カ ン	フ ェ ロ ニ ア	ナ ガ エ ミ カ ン	37, 40
<i>Ficus glomerata</i> Roxb.	ク ワ	イ チ ズ ク	ウ ド ン ゲ ノ キ	22
<i>Gaertnera racemosa</i> Roxb.	キ ン ト ラ ノ オ	ホ ザ キ サ ル ノ オ	ホ ザ キ サ ル ノ オ	48
<i>Gardenia</i> spp.	ア カ ネ	ク チ ナ シ	—	51
<i>Gmelia arborea</i>	ク マ ツ ズ ラ	キ バ ナ ヨ ウ ラ ク	キ ダ チ キ バ ナ ヨ ウ ラ ク	34

<i>Gossypium herbaceum</i> L.	ア	オ	イ	ワ		タ	イ	ン	ド	ワ	タ	28
<i>Holarrhena antidysenterica</i> Wall.	キ	ョ	ウ	チ	ク	ト	サ	カ	キ	カ	ヅ	32
<i>Jasminum auriculatum</i> Vahl.	モ	ク	セ	イ			ジ	ャ	ス	ミ	ン	52
" <i>gracillimum</i> Hook. f.												52
" <i>grandiflorum</i> L.												51
" <i>officinale</i> L.												22, 51
" <i>Sambac</i> Ait.												20, 22, 50
" spp.												50
<i>Khaya</i> spp.	セ	ン	ダ	ン			カ				ヤ	46
<i>Mangifera indica</i> L.	ウ	ル	シ				マ	ン	ゴ		ー	36
<i>Mesua ferrea</i> L.	オ	ト	ギ	リ	ソ	ウ	テ	ツ	ザ	イ	ノ	30
<i>Michelia champaka</i> L.	モ	ク	レ	ン			オ	ガ	タ	マ	ノ	39, 47
" <i>longifolia</i> Blume.												48
<i>Microberlinia brazzavillensis</i>	マ				メ		ミ	ク	ロ	ベル	リ	34
<i>Mimusops elengi</i> L.	ア	カ	テ	ツ			ミ	ム	ソ	ー	プ	48
" <i>Kauki</i> L.												24
<i>Momordica charantia</i> L.	ウ				リ		ツ	ル	レ	イ	シ	61
" <i>monadelpha</i> Roxb.												60
<i>Musa sapientum</i> L.	バ	シ	ョ	ウ			バ	シ	ョ	ウ		19
<i>Nyctanthes Arbor-tristis</i> L.	モ	ク	セ	イ			ヨ	ル	ソ	ケ	イ	52, 53
<i>Nymphaea lotus</i> L.	ス	イ	レ	ン			ヒ	ツ	ヂ	グ	サ	20
<i>Pentapetes phoenicea</i> L.	ア	オ	ギ	リ			ゴ		ジ		カ	49
<i>Phyllanthus Emblica</i> L.	ト	ウ	ダ	イ	グ	サ	コ	ミ	カ	ン	ソ	20, 35, 36
<i>Plumbago zeylanica</i> L.	イ	ソ	マ	ツ			ル	リ	マ	ツ	リ	59
<i>Poe cynosuroides</i> Retz.	イ				ネ		ポ				ア	30
<i>Pterospermum acerifolium</i> Willd.	ア	オ	ギ	リ			シ	マ	ウ	ラ	ジ	24, 49
<i>Pterospermum</i> spp.												49
" <i>suberifolium</i> Lam.												24, 49
<i>Santalm album</i> L.	ビ	ャ	ク	ダ	ン		ビ	ャ	ク	ダ	ン	43
<i>Schleichera trijuga</i> Willd.	ム	ク	ロ	ジ			シュ	ライ	ヘ	ラ		41, 56, 57
<i>Shorea robusta</i>	フ	タ	バ	ガ	キ		サ	ラ	ノ	キ		34
<i>Spondius pinnata</i>	ウ	ル	シ				ビル	マ	ウル	シ		36
<i>Stereospermum suaveolens</i> DC.	ノー	ゼ	ン	カツ	ラ		セン	ダン	キサ	サ	ゲ	45
<i>Styrax Benzoin</i> Dryand	エ	ゴ	ノ	キ			エ	ゴ	ノ	キ		43
<i>Swietenia macrophylla</i>	セ	ン	ダ	ン			マ	ホ	ガ	ニ	ー	46
" <i>mahogany</i>												46
<i>Tabernaemontana coronaria</i> Willd.	キ	ョ	ウ	チ	ク	ト	サ	ン	ユ	ー	カ	43
<i>Tamarindus indica</i> L.	マ				メ		タ	マ	リ	ン	ド	36, 41
<i>Taxus cuspidata</i> S. et Z. var. <i>nana</i> Rehd.	イ	チ	イ				イ	チ	イ			42
<i>Tectona grandis</i> L. f.	ク	マ	ツ	ヅ	ラ		チ	ー	ク	ノ	キ	34
<i>Terminalia Arjuna</i> Bedd.	シ	ク	ン	シ			タ	ー	ミ	ナ	リ	39
" <i>catappa</i> L.												37
" <i>chebula</i> Retz.												18, 19, 36
<i>Terminalia</i> spp.												37, 40
" <i>tomentosa</i> Bedd.												39
<i>Vitex Negundo</i> L.	ク	マ	ツ	ヅ	ラ		ハ	マ	ゴ	ウ		53
<i>Zizyphus Jujuba</i> Lam.	ク	ロ	ウ	メ	モ	ド	ナ		ツ	メ		41, 56
" <i>jujuba</i> Mill.												41